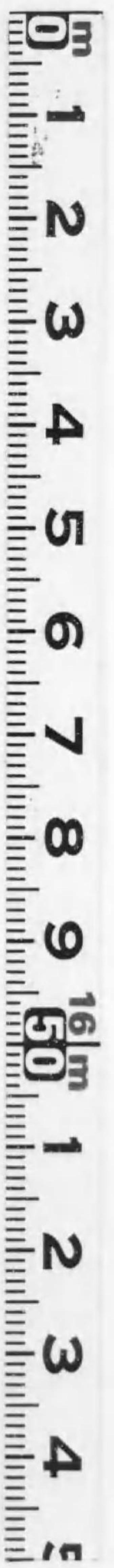
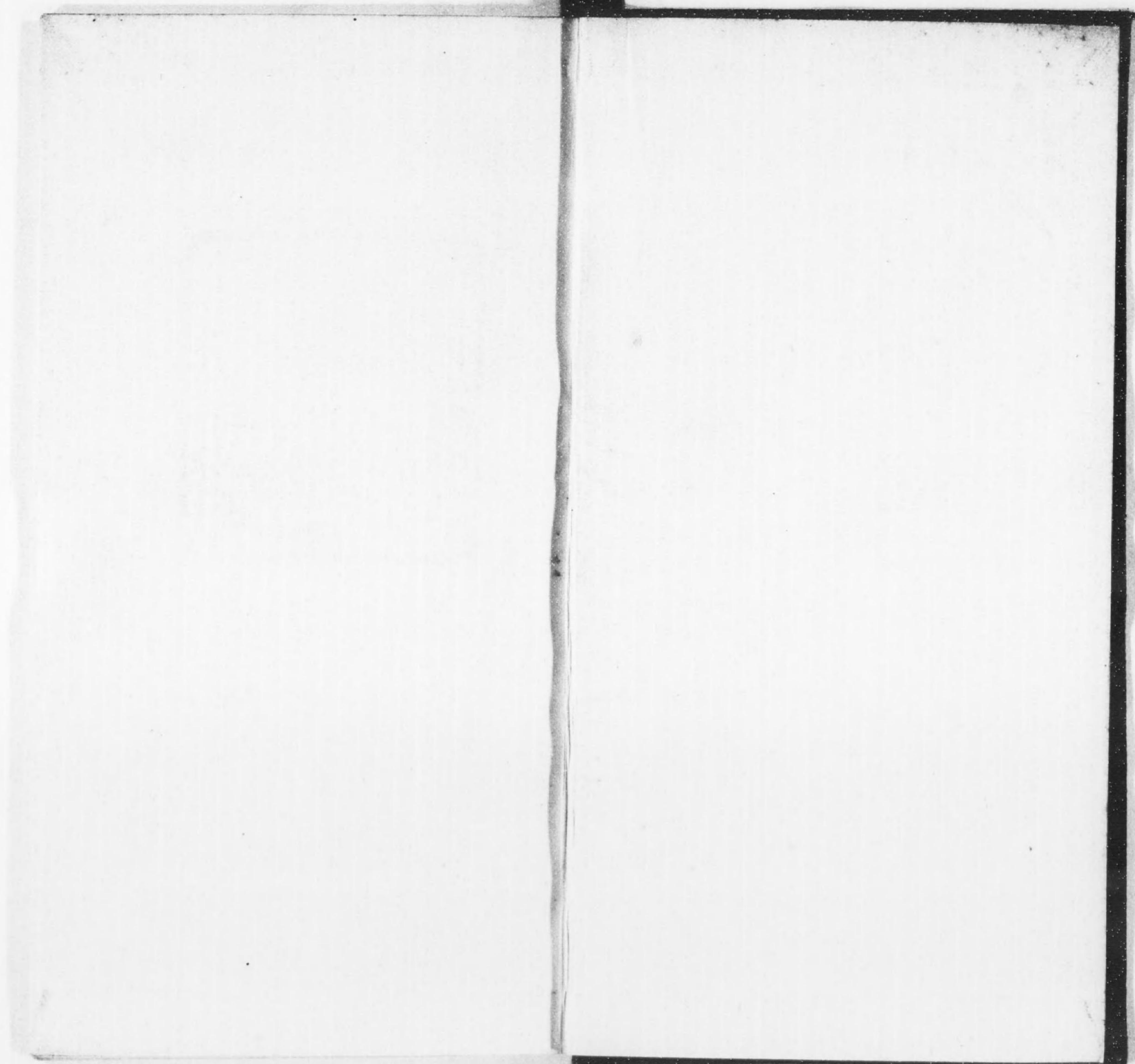


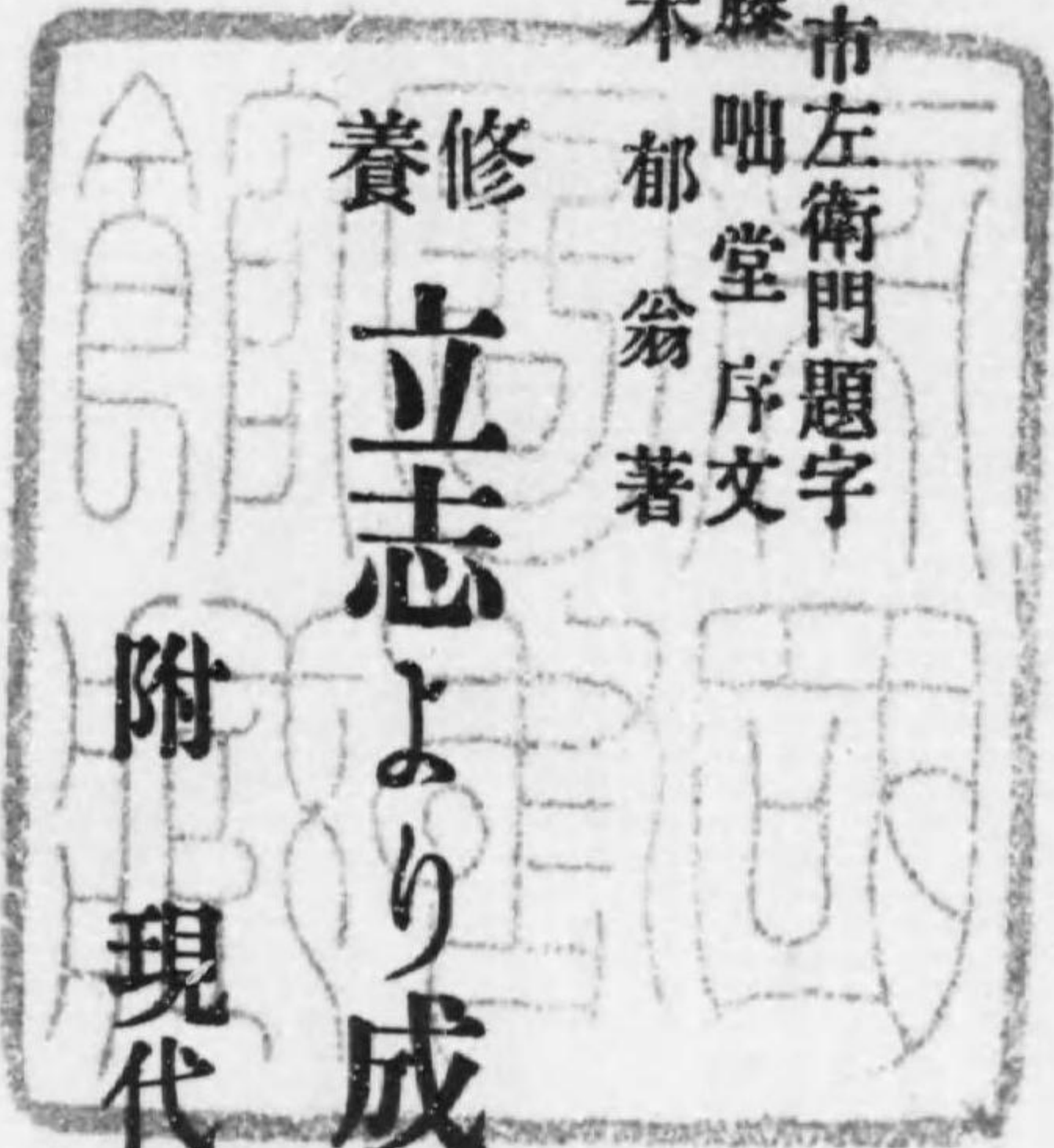
始





持109
911

森村市左衛門題字
加藤咄堂序文
鈴木郁翁著



修養
立志
より
成功
まで

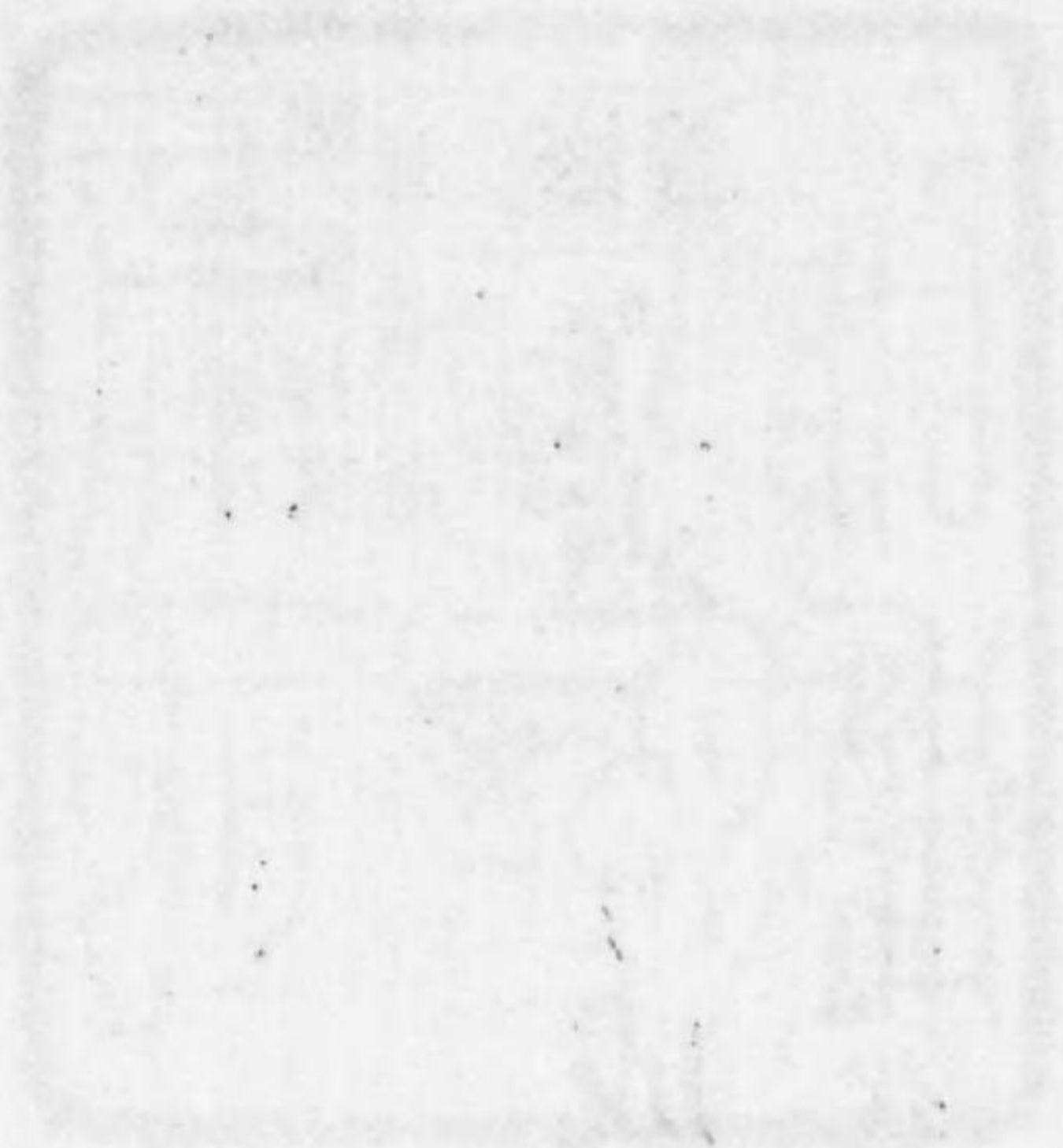
附
現代名士の逸話

大正
13. 2. 23
内交



志

本林村中



序

立志は人類の特能なり。萬物に超越せる所以一に此に存す。吾等抑も如何に志を立てて其の特能を發揮すべき、世の所謂志を立つるもの多くは生を送るの手段を求むるに急にして、深く生の根本義を尋ね、之れをして意義あらしむるの道を講ずるなし。此の如きは唯だ生存の欲求に驅られて食を求むるに汲々たる飛禽走獸と相距る一步のみ。立志の要は何が故に生きざるべ

からざるかの問題に出發して、如何にして我が生を有意義ならしめ、頂天立地、敢て他に累せられざる我が人格の權威を保持し、我が此の乾坤に印せる足跡をして不滅ならしめんとする苦心に存せざるべからず。此の苦心あるが故に我如何にして生活の獨立を確保せんかに焦慮し、我如何にして我が道を行はんかを腐心し、道立つて猛然として往き、事定つて敢爲として屈せず、終に我が存在をして社會に意義あらしむ。今鈴木氏、此の根本を究めて其の方法を示し、立志の動機より道程に入り、町

嚀反覆、後進を提撕せんとす。これ我が平生懷抱する所を更に的確に、更に詳密に縷述せるもの、予豈に一言の本書の行を壯にするものなからんや。

雨、新緑を洗うて翠いよく濃かなる五月の天、
代々木の村莊に於て

咄堂居士

修養

立志より成功まで 目次

- 一、現代と現代の青年……………一
- 二、まづ奮起せよ……………六
- 三、志を高く保て……………一〇
- 四、度量を廣くせよ……………一六
- 五、獨立の精神……………二二
- 六、頼むべきは自家の力……………三〇

目次

七、人事は偶然に非ず……………三五

八、進んで機會を作れ……………四〇

九、斷じて行へ……………四七

十、初志を貫け……………五四

十一、艱難汝を玉にす……………六〇

十二、火の如き熱心……………六六

十三、精力主義たれ……………七四

十四、意思を堅くせよ……………七九

十五、時は金なり……………八七

十六、大事は小事より……………九六

十七、黙々として働け……………一〇一

十八、貧賤は成功の基……………一〇八

十九、苦學力行……………一二四

二十、正直の頭に神宿る……………一二三

二十一、節儉の美德……………一三三

二十二、機を見るに敏なれ……………一三九

二十三、果斷よく大業を成す……………一四五

二十四、十年一日の勤勉……………一五一

二十五、機智を用いよ……………一五六

二十六、私徳を慎め……………一六四

二十七、完全なる健康……………一七三

附録……………

現代名士の逸話……………一〇〇

目次終

修養 立志より成功まで

一 現代と現代の青年

「水の流れと人の行末」ばかり解らぬものはない。幼ない時、共に同じ學校で同じ書をよみ、同じ腕白をくり返して居た者が、五年十年の後には、天地雲泥の差のやうに、まるで別人となつてしまふ。昔神童と稱へられた者が、今は僅に村役場の憐れな

現代と現代の青年

立志

書記として、寂しく暮して居るかと思ふと、昔郷黨に暴れ者よ、腕白者よと蔑まれた者も、或は廟堂に高臥し、或は又、一代の富豪として、豪華を競ふて居る者もある。各々その人の運命とは言ひ乍ら、實に不思議な世の中である。どうしてかう云ふ運命が、人の生命の發展と共に、つき従つて行くのであらうか。恐らく決して偶然の事ではあるまい。そこに必ずよつて来る原因がなければならぬ。

凡そ人の此世に處するその出發點は、青年の時代でなければ

ならぬ。青年の時に蒔いた種々の種は、追々年月の経過すると共に、收穫を見るのである。よい種を選び、よく培養に心掛けた者は、多量に、立派な收穫を得られる。之に反して、悪い種で、悪く培養されたなら、損失を得るのは當然であらう。そしてその收穫の良否輕重が、人生に於ては幸不幸運不運に相當する。青年時代の種の種類、培養の良否は、人生の行路に於ける別れ道である。だからその始めふみ出す人生の第一歩に、深甚の注意を拂はねばならぬ。一步過れば極樂行きの人、忽ち地

立志

獄に墮ち、地獄落ちの人も、忽ち極樂行きの人となる。それが同じ學びに居たものが、村役場の書記に終り、廟堂に高臥し、或は一代の富限者となる理由である。

然らば如何にしてこの一步を履み出すべきか、要は只その人の意志の如何にあらう。その人の所謂心掛け一つにあるものである。殊に現代は社會の文明が進み、人類の欲望は益々進んで行く、従つて生存競争の劇しいことは、とても昔の比較ではない。そしてそこに適者生存の原理が實現されて居る。生活難と

云ひ、就職難と云ひ、成功難といふ叫びは、皆その結果であるがしかもそれは只單に弱者の聲とのみ、一喝し去るに忍びない「如何にしてこの現代に強者たり得るか、成功者たり得るか。」とは、現時一般青年の絶叫である。勇ましくも、亦悲痛なこの絶叫よーしかし吾々は何人もこの叫びをくり返しながら、飽までこの社會に健闘せなければならぬ。以下項を追うて説く處の眞意は少くともこの問題を解決する處にある。

まづ奮起せよ

二 先づ奮起せよ

昔むかしから身みを立て、名なを天下てんかに擧あげ得えた人ひとも、幼こない時ときから大たい志しを抱いだいて居をつた譯わけではない、幼こない折せりは、何人なにびとも同おなじ小供こどもであつた。然しかし小供こどもではあつたが、ある機き會かいに遭あつて、毅き然ぜんとして奮ふん起きし、そして幼こない夢ゆめから覺さめたのである。この奮ふん起きこそ、志こころざしを立てる唯ゆ一の動機どうきである。奮ふん起きして始はじめて、高たかい理想りも懷抱くわいはうし得うるやうになるのである、「舜しゆんも人ひとなり我われも人ひとなり」

で、元もとより舜しゆんも人間にんげんであつた、我われも舜しゆんと同おなじ人間にんげんである。やつて出来できないことではないと思おもふのである。けれども之これが常じやう人じんになると、一時的じてきに終おつてしまつて、一日いちにち二日にかと經たつとまるで忘わすれてしまふ、然しかし將來しやうらい名なを擧あげるやうな人ひとは、そこが違ちがつて、一度いど奮ふん起きし志こころざしを立てれば、終世しゆうせい變かることはない。いつもこの強つよい堅かたい決心けつしんを持つて居をるのである。それが常じやう人じんと偉人ゐじんとの相違さうみである。

德望とくぼう一世せに高たかかつた福澤諭吉ふくざはさとしきち翁をうの話はなしであつたが、今いまの實業界じつげふかい

まづ奮起せよ

の古老森村市左衛門氏はこの堅い奮發心を持つた人であつたと云ふ。それは氏が壯時米國に雜貨店を開いた時の話である、始め氏は、開店の當時は、大分景況もよく、この分ならどうやら志を變へず、成功しそつたので喜んで居た。處が二年三年経つ中に、計らず種々の困難が起つて來て、事々に思ふやうにならず、追々悲境に陥つて來た。そこで氏は、平常親しくして居た福澤翁の處へやつて來て、失敗の始末を語り、目下の事情の困難なのを訴へた。之を聞いた翁は、同情を寄せるかと

思ひの外、頗る冷淡に、「へこたれな」と一言云つたきりであつた。氏はこの詞を聞くと、ぐつと疝癢に障つて、「失敬な、逆境に苦しんでゐるが、奮起した一念を忘れるやうな森村ぢやないぞ、へこたれなどは何だ。」今に見ろ」と口には出さなかつたが、心の中に決して、そのまゝ歸つて終つた。それから氏は、大に奮闘を續け、遂に先の失敗を回復し、更に大に成功したさうである。

これは福澤翁の一言がよく森村氏を刺激したのであるが、や

立 志

はり、氏にかうした心掛けのあつた事が常人に優れた處であつたらう。かう云ふ例は、所謂世の成功者の中には、古今東西に少くない、だから世に成功しやうと心がける人は、まづ第一にこの奮起の一念に想到し、そして絶えず念頭を離さず、奮勵努力することが肝要である。これが立志の第一義であるといはねばならぬのである。

三 志は高く保て

世に「眼の向く處へ魂」と云ふ諺がある。之は人の精神はその人の眼の着け所によつて、高くも低くも向き進むと云ふ意味である、これは如何にも至言で、常に志を高く持ち、眼を天につけて居る人は進歩向上し、眼が常に地にある人が失敗墮落するのは、吾々の暫々目撃する處である。

この點から世の中の人を分けて見ると、二種の人物がある。即ち、自分と比較するに例を上取る人と、下にとる人とである、下に採る人は「自分は酒は飲むが、何某のやうに賭博はせ

志は高く保て

立 志

ぬ、夜遊びも随分して勉強はしないが、まだ落第したことはない」と言ふ。之に反して上に比較をとる人は、「釋迦も人である、孔子も人である、彼等の出来ることが吾等に出来ないことではない。」と思ふ。一方は己れより劣つて居る者に優れるを以て誇り、一方は己れより優れるものを思ひて己れの身は及ばないのを恥ぢる。そこに自ら志の高下、等差は明であり、従つて將來の進歩向上は豫想されるのである。

高い塔などを修繕する時、足場をかけるが、その足場の下に

は必ず席を張つて下の見えないやうにするさうである。それは職人が下を見れば脚が震へて、魂も身は添はず、安心して仕事をすることが出来ないからである。高い樹に登るにしても、その通りで、樹の梢に目をつけて登れば容易く登れるが、下を見れば、時に墜落を免れないのである。

かうは言ふけれども、人は只、志をのみ高くして足許をお留守にして居ては、之亦思はぬ失敗に陥るのである。眼は飽くまで天に向けて、進歩向上を計るがよい。だがその場合、同時に

志は高く保て

足を地面から放さぬやうにせなければならぬ。とかく上にのみ
 氣をとられて居ると、足許がお留守になり勝ちである。「突當り
 其方も雲雀見る人か」で、餘り樹上に居る雲雀にのみ氣をと
 られて居ると、遂に人に突き當つてしまうのである。だからこ
 の人生の行路にあつても、常に上を思ふ念を離さず、そして足
 許に氣をつけ、一歩一歩堅く大地を履みしめながら、上へ上へ
 と向上發展の道を切り拓いて行く。「下見れば我に優りしものは
 なし、笠とりて見よ空の高さを」の歌は吾々の三思すべきもの

である。

四 度量を廣くせよ

我々の住むこの大地は、如何に穢いものでも、清いものでも
 共に取り入れて萬物の生育に多大の便宜を興へる。又かの大海
 も、如何なる汚物も吸ひ入れて、何の凝滞をも留めない。青年
 者の心を、同じく大地大海のやうに、何物も包含して之を自家
 のものとし、發展の資料にする抱負がなければならぬ。世の中

度量を廣くせよ

立 志

には種々な人があつて、それ等の人と事を共にする場合、必ず善良な人とのみ、共同出来ること極まるものではない。然して世に清い人ばかり居ないからと云つて、己れ獨り孤立して、人と交らなければ。とても事業はなり遂げられないのである。だから人の汚れもそのまゝに取り入れて、しかも己れは汚れないやうに志を持つべきである。

昔、楚の屈原は、潔を好み、獨り行くの士であつたので、世の中に入れられず、顔色は憔悴し、身體は瘦せ果て、或日澤畔

を行吟して居た。所へ一人の漁夫がやつて来て、「子は三閭大夫に非ずや、何の爲に此所に至る」と聞いた。屈原は、「世を擧げて濁り、我獨り清む。衆人皆醉ふ、我獨り醒む、是を以て放たれたのである」と云ふ、すると漁夫は「聖人は物に凝滞せず、能く世と推し移る、世人皆濁らば何ぞその泥を漉してその波を揚げざる、衆人皆醉はば、何ぞその糟を餉うてその醜を翫らざる」と云つたさうである。

之は有名な「漁父辭」の話であるが、この、君子は物に凝滞

度量を廣くせよ

立志

せず、圓轉の心持ちあり、しかも自分を守る事が堅固であること云ふのが、吾々の常に思ふべき事である。蓮の泥中から出て、尙花の美しいやうに、濁つた世を入れて、尙美しく清い大度量を持つて、衆に卓越せなければならぬ。

この大度量の修養が、完全に出來れば、その人の行は立派に、見識も高くなつて來、従つて思想も高く大きくなるのである。こゝまで來ると、この世の中で腹の立つと云ふことがなくなる。腹の立つことのない位に、度量の大きいことはない。昔

加賀の名醫の服部元好は自分の家が火事で焼けて終つたが、少しも驚かず泰然として居た。すると人が之を冷笑して、「御醫者さん家の黒焼何になる」と戯れると彼はすかさず「大工左官の腹薬なり」と答へたさうである。これは見識の高い處から生れた大度量であらねばならぬ。

仙崖和尚と云ふ有名な坊さんが、故あつて美濃國の或る寺から、傘一本で追ひ出された時、「傘をひろげて見ればあまが下、身はぬるゝともみのは頼まじ」と口吟したと云ふ話もある

度量を廣くせよ

立志

が、之も同じやうな度量である。

豊臣秀吉は随分性急の人のやうであつたが、さすがは天下を統御しただけあつて、大度量を持つて居た。小田原の北條氏を攻めた時、秀吉は陣中であつたが、餘り長らくの對陣でやゝ退屈をして來た。そこで秀吉は大阪から能役者を招いて、一夜陣中に酒宴を催した。すると其時浮田秀家の客臣に、花房助兵衛職之と云ふ人があつたが、この酒宴の催を見て、秀吉の陣營の前に立ち、大聲に叫んで、「長々の對陣で、さうでないにも全

軍の意氣沮喪して居る際、大將たるものが能狂言などをやらして居るのは以の外だ」と言つた。之を聞いた秀吉は大に怒り、直に浮田秀家を召して「家來の身を以て我を誹謗するは無禮な奴だ。磔刑にせよ」と命じられた。秀吉は不憫に思つたが致し方なく、御請をして下らうとすると秀吉は少し考へて、「あの者の申すことも、一應道理とも思はれるから、磔刑は不憫である切腹申しつけよ」といふ。秀吉は有難しと御請して下らうとすると秀吉は又呼びよめて「待て待て、我は今三軍の將として、此

度量を廣くせよ

立志

地に臨み、誰一人我を非難するものもないのに、あゝも立派に言ひのけたのは神妙である。切腹に及ばず、褒美を取らせよ」と言つたといふ話がある。

現代の青年も、かう云ふ大度をもつて、誘惑をうち従へ、人言を入れ、志を高く持てば、成功は疑ないといつても、間違ひはあるまいと思ふ。

五 獨立の精神

何人もこの世に處しては、孤り居り、獨り棲んで居られるものではない。互に相寄り相輔ける性情をもつたものである。この點から觀ると、人がこの世に處しては、只その當時世に行はれて居る風俗習慣に従ひ、決して奇異の舉動をしたり、又は他人の耳目を驚かすやうな行をしてはならぬのである。然し一方から之を觀ると、人の頭の中には、自ら一個獨立の精神があつて、之はその人の智識が進むに従つて、益々旺盛になつて來る。そしてこの精神は世間の流俗に従はず、時流に超越して

獨立の精神

立志

自ら一局面を開かうとする傾向があるものである。然し之は果してよくない思潮であらうか。

元來一つの社會は必ず獨立したものでなければならぬ。何故なれば、その種屬を完全に發達させ、同じ種の壓迫に反抗しその保存を確にしなければならぬからである。然して之を一般に觀るに、やはり社會をなす處のものには必らずこの獨立の精神がある。之があつて社會は全く俗塵に俗了されず、存在を保つて行けるのである。之あるが爲に一國も獨立し、學問も獨立し、

道徳も獨立して行くのである。しかも文明の社會に一般流行の盛なのは既に獨立の精神の缺乏した證據で、文明の恐るべき弊風である。

そしてこの獨立の精神が、國家社會學問道徳に就て必要であるならば、同じく小さい一つの社會に例へ、國家に例へられべき個人にも必要でなければならぬ。茲に於て個人のこの精神の上立つといふのは當然である。否、進んで充分に養ふべきである。

獨立の精神

立志

茲にこの精神を涵養するに就て、注意すべき要素が二つある。一は知見を廣めること、二は有形の物に就て、所以なく他人の助力を仰がぬと言ふことである。

まづ人の智と云ふものは、限りのあるものであるから、解らぬことは、他人に問ふて利益を求めるのは、當然であり、又人間お互ひの務である。けれども長い複雑な人生の行路に於て、何事によらず他人に聞き、他人に依頼して居ては、自分の身體はあるけれどもないに等しくなる。そして遂には他人の言を信

じすぎ他人の言ふがまゝに行動するやうになつて来る。それはまるで、自分には一錢の貯蓄もなく、他人の恵によつて暮して居ると同じである。茲まで來るとその人は全く獨立の意義を失つた者である。だから人は一般の普通の智識は養ひ持つて、事に毎に他人の意見を必要とせないやうにせなければならぬ。

次に人は何等かの機會によつて、貧しくもなり、富裕にもなるのである。隣家は百萬の富を積んで居るのに、己の家は一錢の貯もないと云ふのは、誠に苦痛な事には違ひない、然し之

獨立の精神

立志

は文明社會の社會組織が悪い^{わる}ため。この運不運^{うんふうん}を來^{きた}したのであるから、俄に人力^{にんりよく}で如何^{いかん}ともすることの出來^{でき}ないものである。それ故隣人^{ゆかりんじん}を羨^{うらや}むのは愚^{おろか}なことであつて、まして助力^{じよりよく}を仰^{あふ}ぐなごゝは以^{もつて}の外^{ほか}である。自分^{じぶん}は飽^あまでも額^{ひたい}に汗^{あせ}して勞働^{らうどう}し、獨力^{どくりよく}で生活^{せいくわつ}し行くべきである。世^よの中には節^{せつ}を屈^{くつ}して、利^りを採^とるものもあるけれども、之^{これ}は全^{まった}く自己^{じこ}をなきものにしたもので、一塊^{くわい}の黄金^{わうこん}と、自分^{じぶん}とを交換^{かうくわん}したと同^{おな}じである。獨立^{どくりつ}の精神^{せいしん}は茲^{こゝ}に至^{いた}つて全^{まった}く失^{うしな}はれたものである。

要^{えう}するに、智識^{ちしき}のないものは、精神^{せいしん}的獨立^{てきどくりつ}の基礎^{きそ}を失^{うしな}つたものである。返濟^{へんさい}の目的^{もくてま}なく人^{ひと}から金^{かね}を借^かり、謂^{いは}れなく人^{ひと}の助力^{じよりよく}を求^{もと}め、窮乏^{きうぱふ}に際^{さい}して人^{ひと}の哀^{あい}を乞^こひ、迷^{まよ}うて私^{わたくし}に陥^{おちい}るのは、物質^{ぶつしつ}的窮乏^{てききうぱふ}から獨立^{どくりつ}の精神^{せいしん}を失^{うしな}つたもので、最早^{もはや}世^よに存在^{そんざい}の價^か値^ちはないのである。まして獨立^{どくりつ}獨行^{どくかう}、大^{おほい}に天下^{てんか}になすあらんとする青年^{せいねん}は、以上^{いじやう}に述^のべた二^{ふた}つの要素^{えうそ}に注意^{ちゆうい}して、充分^{じゆうぶん}自己^{じこ}の獨立^{どくりつ}を謀^{はか}るべきである。

獨立の精神

六 頼むべきは自家の力

ベンジャミン、ヂスレリーは英國の有名な總理大臣で、演説の名手であつた。この人が若かつた時、大に政海に雄飛しやうとして衆議院議員の候補に立ち、度々選挙を争つたが、一回は一回と失敗に歸し、前後五回争つてやつと當選することが出来た。或時、當時内務大臣であつたメルボルン公が、或る宴會の席上で、彼に、「君は何の目的でさう熱心に選挙を争はれるのか

議院に入つて何事をしやうとするのであるか？」と聞くと、ヂスレリーは直に答へて「私は英吉利の内閣總理大臣になりわたくしの政治上の理想を實現して、聊か國家に盡したいのです」と云つた。之を聞いた満座の人々は大に嘲笑を浮べ、公も亦冷笑を加へられたさうである。しかしヂスレリーは少しも意にかげず、只自己の力を信じ刻苦精勵したのであつた。當時は彼が演壇に立つと、多くの議員は皆輕侮して、その説を聞かうとせず、罵り騒いで妨害するのであつた。或時ヂスレリーは大に怒

頼むべきは自家の力

立志

つて、「諸君、余の演説を聞きたくなければ聞かずに居給へ、笑はうと思へば笑ひ給へ、余は少しも驚かない。余は今、黙して席に復すが、諸君は早晚必ず余の言に、耳を傾けざるを得ない時が来るのを記憶し給へ」と言ひ放つたのである。後に至つて果してこの詞の通り、その名演説は満場の議員を傾聴させ、感嘆の聲を放たしめた。然もその上總理大臣の榮譽もかち得たのである。

この話は明に、ヂスレリーが自己の力を信じ、萬人嘲笑の中

にあつて、獨立獨行、刻苦精勵した結果、最後の勝利を得たのである、この只自己の力を信じ、之によることが、現代に於て最も安全で、又最も確實な成功法である。殊に現代は實力の世の中である。明治維新以前、封建制度の世にあつては、社會の萬物は一定の習慣によつて、一定されて動くことがなかつた、家業も財産も世襲によつて相續されて居た。だから世の信用も家にあつて人になかつたので、少し位自家の力が足りなくても、不足はなかつたのである。然るに今の時代はこの制度は全く破

頼むべきは自家の力

壊され、只々自力あるものが最後の勝利を得るやうになつて来た。これは文明の惠澤であると共に、一方才力なきもの、滅亡である。しかもこれは自然の優勝劣敗の原則に協つたもので、最も公平な天理であらう、そしてこの風潮は、赤手巨萬の富を重ね得ることも容易である。之は現代社會の最も興味ある處で自己の智不智、能不能で、如何なることもなすことが出来るのである。この故に、現代に成功せんとする青年は、決して人に頼らず、頼るものは己が力のみ、身外には何物もないことを切

に思はねばならぬ。即ち吾が運命は我れ自ら開拓する覺悟が必要である。英の文豪カーライルも、之を戒めて言つた。「人の袖の下にかくれんとする勿れ、汝は汝自分二つの眼を有せざるか」
 自己の力に頼り、自己の眼で觀、天下の大道を濶歩すべきである。

七 人事は偶然に非ず

人事は偶然に非ず

立志

かのアイザック、ニュートンが或日庭園を散歩して居ると、突然頭上の林檎の樹から一つの實が足許に落ちて來た。ニュートンはこの現象を非常に不思議に思ひ、種々に研究を進めて行つて、遂に地球に引力あることの一発見を完成したと云ふ話がある。

この話はよく或種の大発見は、偶然の機會からなされるものであるといふ例に引用されるのであるが、然しよく考へて見ると、決して偶然の出來ごとではないのである。ニュートンが庭園

を散歩して居た時は、已にこの問題に就て頭を悩まして居た時であつた。ニュートンにして、久しい以前からこの問題を心に置かずに居たなら突然林檎の實が落ちたとて、何の感應する處があらうか。幾久しい勞苦忍耐の精神は、計らず林檎の實の落ちたによつて、糸口を開かれたのである。決してこの考のな

いものにも、この大発見のある譯のものではない。

又かの吊橋を發明した、サー、サミュエルの如きも、或朝ふと庭先の檐に、蜘蛛が巢をかけて居るのを見て、始めてその構造

人事は偶然に非ず

立志

を思ひついたと言ふが、之も久しい以前から、橋の架け方について苦心研究に耽つて居たからである。

このやうに、大發明大發見大事業は、一見偶然のやうに思はれて、其實は決して偶然ではないのである。英國の文豪ラスキンが云つて居るやうに、「鶯の卵からは鶯が生れる」で、鶯の卵から決して鶴や孔雀が生れるやうなことはない。依つて來ることは、必ず依つて來るだけの理由がある。世に「果報は寢てまで」とか、「ぼた餅は棚にあり」とか云ふことがあるが、決して

て偶然にぼた餅が棚の上にある譯でもなく、果報が寐て居れば來る譯のものでない。寐て居れば來るだけの理由、棚から落ちて居るだけの原因がなければならぬ。そして必ずその原因と理由とが存在して居るものである。だから大なる發明、大なる事業は、常に大なる修養、大なる準備、大なる苦心から生れなければならぬ。

つい近頃の話であるが、かの有名な米國の電氣に關する大發明家エヂソン氏に或人が、「何う云ふ心がけが發明を齎らす動機

人事は偶然に非ず

立志

「となりませうか」と聞くと、氏は、「只、「一大望心です」と答へたといふことである。

この一大望心といふ詞は、確に大なる準備、大なる修養、大なる野心を含んだ詞である。

八 進んで機會を作れ

ニュートンの引力發見にしても、サミエールの吊橋の發明にしても、偶然でないことは已に述べた。只その人の眼のつけど

ころ、觀察力の如何と云ふ事になる。即ち觀察力によつて、偶然にこの機會を掴へたので、要するに平常の用意である、凡そ大事を企て、大事業を爲やうとする者は、この機會を捉へる心を養ひ、進んで自ら機會を作らねばならぬ、決して機會の來るのを待つて居てはならぬ。自分で自分の道を拓かうと決心し、その準備をもつ處の人は、必ず斯ういふ機會を掴むことが出来る。勿論機會といふものは、道傍にむやみに轉がつて居るものではない、只機會を作らうとして心の眼を開いて努力して居

進んで機會を作れ

立志

る者に限つて見えるので、必ず何處にか存在して居るものである。そしてさう云ふ眼のある人には、一擲の土くれも、一個の石塊もこの機會となるのである。古から大事業をなし、大成功をした人でも、組織的に學問したもののばかりでもなく、又金錢の充分にあつた人ばかりでもない、只、大成功を遂げ大人物になり得た人は、常に充分用意と、そして世界といふ大學校とに學んだ人々である。この大學校で經驗と云ふ課程を學び終へた結果、物事の理に精進し、一寸した些事も、立派な機會とした

てしまうのである。世の中にはよく事業をしたいが金がなくて出来ないとか、かう云ふ道具がなくて出来ないとか云ふ人があるが、さう云ふ人は單に空想だけで、眞に自己の精神が働いて居ないのである。精神さへ働いて居つたなら、他の物質上の缺乏はそれによつて補はれる譯である。我々は飽までもこの機會を作つて機會に乗すべきである。

昔、かの希臘マケドニア王歴山大王が、世界統一の抱いて、歐亞の大陸に雄飛した時、或る所で激戦の後、大勝を

進んで機會を作れ

得たのであつた。すると部下の一將軍が彼の前に来て、「大王！機會さへあれば、尙長驅して次の市街を攻撃しては、如何ですか」と言ふた。所が王は、「機會さへあれば？いや余は自ら進んで機會を作るのである」と答へたさうである。さすがに稀世の英雄だけあつて、常にさういふ心掛であつたのである。

米國ボストン大學の創設者のアイザック、リッチは、十八才の時一事業を起さうとして、郷里ケープコットからボストンの町にやつて來た。その時懷中には僅に八圓の金よりなかつた。

然るに如何に繁華なボストンでも、彼の思ふやうに好運は、石や瓦のやうに路傍に轉がつては居なかつた。彼は職業を求めやうとして軒別に雇口をきいて廻つたが、一人も雇つてくれるものがない。一日二日と經つに従つて、彼はとてもこの町は、自分のやうな田舎者の居るべき處でないと悟つて、斷然歸郷しやうと決心した。然しふと思ひ返してみると、一旦故郷をどびだして、思はしい職業がないからとて、すごとく歸るやうではとても何事も成功するものではあるまいと思はれる。彼は猛然

進んで機會を作れ

と「よしよし、どうしても地位がなければ、自分は、自分で之を作らう」と堅く思ひ定めた。そこで彼は板の切端を見つけて出して一つの箱を拵へ、荷車を一臺借りて来て、それに載せ、ポストンに近い海邊に行つた。彼はこゝで牡蠣を買ひ集め、之をひいてポストンの町を賣り歩いた、かくして刻苦忍耐して漸く少しの財産を作つた。そして熱心に勉強して追々成功し、遂に大學を經營するやうになつたと云ふのである。

九 断じて行へ

ナポレオンは世界の英雄である。彼の傳記を読み、彼の一代の事業に想ひ到れば、如何に彼の生涯は常に努力奮闘に色彩られて居るかを發見するであらう。有名な話に、彼は「我が用ゆる辭書には「不可能」なる文字なし」と揚言したといふが如き彼の一生を語つて遺憾ないと云つてよい。「断じて行へば鬼神も亦避く」である。まして人世の事で、堅忍不拔の精神を以て努

断じて行へ

力りよくしたならば、何事なにごとも、出来できないといふことはない筈はずである。昔むかしから偉人ゐじんとか傑士けつしとか云いはれた人は、今日こんにち我々われわれが想像さうざうしてとても出来できないやうな事を、容易やういになし遂とげて居ゐる。そこが偉人ゐじんであり傑士けつしであるかもしれないが、彼等かれらの出来できることを、同じ人間にんげんなる吾々われわれが出来できない事ことはないのである。出来できないのは成就じやうじゆさせやうとする努力どりよくが足りないのである。即すなはち常人じやうにんのは「能あたはざるに非あらず、爲なさざるなり」で、常人じやうにんは努力奮闘どりよくふんどうをせないのである。

この爲なすと爲なさるゝとが、偉人ゐじんと凡人ぼんじんとの岐わかれる點てんで、支那しなの朱子しゆしの語ことばに「陽氣やうきの發はつする處ところ、金石きんせきも亦また透とうる、精神せいしん一到たう何事なにごとか成ならざらん」とあり、又西洋またせいやうの古諺こげんに「意志いしのある所ところ、即すなはち途みちあり」とあるが、共にこの理りを語かたつたものである。

之これも有名いうめいな話はなしであるが、ナポレオンが曾かつて六萬まんの大軍たいぐんを率ひきゐて、伊太利イタリーに攻め入いらうとした時とき、丁度ちやうどアルプス山さんにさしかゝつた。ナポレオンは早速さつそく麾下しやうぐんの將軍しやうぐんマクドナルを呼よんで、近ちかくスプリューゲンの嶮けんを越こえやうと命めいじた。スプリューゲンは瑞スウェーデン

斷じて行へ

西から伊太利に行くアルプス山の嶮道である。しかも時は十一月の末で、夏も尙雪の深いアルプス山のことであるから、今は満目只雪皚々たるばかりである。その上に北海から吹いて来る寒まじりの風は、人の面を向けて立つことも出来ない位である、さすがのマクドナル將軍も、この命令には少しく躊躇したが、ナポレオンの決心の動かすことの出来ないのを知ると共に、味方のマッセナが伊太利のゼノアで敵の包圍を受け、飢餓に迫つて居るのみならず、勝ち誇つた奥軍はニースの都門を砲撃して居

るので、一刻も猶豫すべき時でないのを知つて居た。そこで直に命の通り、兵を點檢し、軍装を調べ、更に出發の命を待つて居た。その時、このアルプス越の企を聞いた英奥の軍では、この嚴冬の候、しかもまだ車馬の通じたことのないスプリューゲンの嶮道を、六萬の大軍と總ての兵站とを以て越えやうとするのは無謀といふよりも、寧ろ狂氣の沙汰であると嘲笑して居た。然しナポレオンの胸中には堅い自信があり、のみならず三軍の將卒の胸にも、このナポレオンの大氣魂、大自信を宿して居たの

斷じて行へ

で、遂に雪のアルプスに向つて進軍した。風のまに／＼響く進軍喇叭の聲も、吹きしきる雪の朔風の爲に、やゝもすれば杜絶えがちである。しかも谿を下り、蜂を傳ひ、或時は落ちて来る雪解の爲に、殆んど一中隊に餘る騎兵が、幾千丈の谷間に陥ち或時は吹き返す烈風の爲に、先登の一隊は行方知れずになつてしまひ、又或時は六人の喇叭手が、進軍の曲を吹奏しながら、斷崖を滑り落ちて行くこともあつた。かくして全軍の困苦は極度に達し、兵馬の失はれるものも數す知れない位であつた。し

53

かもナポレオンは馬上に立ち上り、大聲に叫んで言ふ。「我が部下の諸士よ、伊太利にある卿等の同胞は、卿等の一刻も早く來らんことを願つて居る。進め、而して征服せよ！先づ第一にこの嶮道と風雪とを、而して次にかの平野と、敵軍とを！」

かくして二週間の後、六萬の軍は三分の一を減じたけれどもその四萬の大軍は、勇姿を伊太利の平野に表した。そして大捷を得たのであつた。

十 初志を貫け

ナポレオンの偉業は、かのアルプス越にその意志の表象がある、彼は晩年非常に窮境に陥つたが、しかもその大志は、生涯變ることがなかつた。この意志の貫徹し、一旦思ひ込んだことは飽くまで成し遂げるの念は、何人にも必要であるが、殊に世に一角の成功を遂げやうと欲する者には、必要かくべからざるものである。「斷じて行へば鬼神も亦避く」で、この大精神の前に

屈しないものは恐らく世にあるものでない。然しこの場合飽くまでも猪突猛進は避けねばならぬが、とにかく一寸した障害で直に初志を變へるやうでは、とても何をしても成功はおぼつかないのである。

種痘といふものが發明されてから、世界の幾千萬の人々は恐るべき天然痘の害毒から免れて居る。然しこの種痘を發明した英國の名醫ジエンネルが、始めその普及に就てどんなに苦心したことであらう。彼はこの發明をなし遂げると、直に倫敦に行

初志を貫け

立志

つて、その説を唱道したが、一人の之を試みやうとするものがなかつた。そしてその時は空しく倫敦に滞在して、三ヶ月の時を費したが、何の得る處もなく、悄然として郷里に歸らねばならなかつた。當時の人はジエンネルは、あのやうな手術をして牛の病質を人に傳染させ、人と獸との差別をなくしてしまはうとするのであると思ひ、又種痘を施した小兒の面は、漸々牛の面に似て來ると云ひ、その瘡は牛の角が生える徴候であるなどの流言さへするのであつた。けれどもジエンネルは、自ら堅

く信ずる處があつたので、之等の批難を耳にもかけず、尙も屢々倫敦の學士會院を訪ひ、種々の効用及び必要を説き、一方には又機會ある毎に、到る處で種痘を施した。かくして實際の報告と自己の所説とで、前後二十何回も學士會院を訪ひ、數年の間撓まずその普及に努めたが爲め、漸く世人の注意を喚起し、遂に學士會院にも認められ、はては世界にその効果を認められて、名醫の名を擅にするに至つたのである。之も彼の初志を屈せず、飽まで精勵した賜と言はなければならぬ。

初志を貫け

立 志

又、關ヶ原の一戦に、徳川家康に破れた石田三成は、さすがに天下を争つた大丈夫であつた。彼は敗戦の結果家康の爲に、生捕られて、正に斬られやうとする日、多くの侍に警護されて、首きる場所へ連れられて行つた、その途中、三成は渴を覺えたので、さ湯を求めた。すると警固の侍は、「今は途中のことで、湯は一寸求め難い、柿の甘干を持ち合せたから、渴かば之を召し上れ」と言うて、柿の甘干をさし出した。三成は之を聞いて、「柿の甘干は痰の毒である」と聞く、余は痰を憂へて久し

い故、食ふまじ」と云つた。警固の者は「只今首刎ねらるゝ人の毒だちは可笑し」と云つて笑ふと、三成の言ふやう「汝等如きものゝ心には、さう思ふも道理である。然し余は豊臣の爲に大志を懐くものである。首刎ねらるゝまでも命を惜むは、何卒本意を達せんと思ふからである。幾度の失敗とて命ある限りは何かあらん。燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らん」と言つたさうである。實際死するまで志を變へぬ處に、英雄の魂はある。不幸にして彼は奸雄の名を得て居るが、その志に至つては、

初志を貫け

吾々の學ぶべき點であらうと思ふ。

十一 艱難汝を玉にす

武勇傳で有名なかの山中鹿之助は、青年の時分、大に妙見大菩薩を信じて居た。そしていつも祈つては「願はくは我に百難千苦を下し給へ」と言つて居た。或人が之を聞いて大に怪みその理由を正すと、鹿之助は「大丈夫生れて艱難に遇はずんば以て我が力を試みる能はず」と豪語したさうである。而して彼

は當時、強勇無双の名を專にしたのである。

人がこの世に處しては、何人も必ず順境と逆境との二境がある、即ち、總てのことに就いて都合よく行く時と、何事をなしてもいつも失敗に終る時とがある。之は言はゞ天に晴雨あり、時候に寒暑のあると同じで、天運の然らしめる處で、人間として決して免るることの出来ないことである。而も人の天性として順境を喜び、逆境を忘むのは當然である。そしてこの順逆二境は免るゝことが出来ないのであるから、之に處する道を常に講

艱難汝を玉にす

じて居なければならぬ。しかし一方から考へると、人の喜ぶ順境は、どかく人の心に油断を起させ、身を優柔に導き、往々失敗に陥らしめる基となるものである、之に反して萬人の忌む逆境は、却つて人の意志を鞏固にして、元氣を鼓舞し、偉人大丈夫たらしめる好機會となるものである。だから逆境は必ずしも忌むべきでない。金剛石のやうな尊い寶石も、研き上げられて始めて光りを放ち、價値を生ずるやうに、人も幾春秋の艱苦を経、研き上げられて、始めて光を放つものである。全く眞の價値

ある者はこの逆境に處したものに多い。この故に逆境は却つて大に喜ぶべきであると言へるのである。山中鹿之助が妙見菩薩に祈つたのも、要はより多き艱難に遭遇して、己が一身を充分に鍛鍊したい爲であつた。かの徳川期の有名な儒者、熊澤蕃山が「憂きことの上につもれかし、限りある身の力ためさん」と詠んだのも、自分自らこの艱難によつて自己を試煉しやうとしたのである。孟子には「天の將に大任をこの人に下さんとするや、必ず先づその心志を苦め、その筋骨を勞し、その體膚を

艱難汝を玉にす

立志

「餓やす」とあるが、大^{だい}事^じ業^{げふ}の前^{まへ}には必^{かなら}ずこの困^{こん}難^{なん}があるもので之^{これ}によつて百^{ひゃく}鍛^{たん}千^{せん}磨^ま、然^{しか}して大^{たい}任^{にん}をなし遂^とげることが出^で来るのである。

今日^{こんにち}世^よの成^{せい}功^{こう}者^{しや}を見^みるに、多^{おほ}くは青^{せい}年^{ねん}時^じ代^{だい}に幾^{いく}多^たの貧^{ひん}苦^く艱^{かん}難^{なん}と戦^{たたか}つたものである。しかもその人^{ひと}々^々は、多^{おほ}くは草^{くさ}深^{ぶか}い片^か田^た舎^か山^{さん}間^{かん}の僻^へ地^ちから生^うま^れて居^ゐる。それは都^と會^{かい}地^ちは總^{すべ}ての點^{てん}に於^{おい}て物^{ぶつ}質^{しつ}的^{てき}供^{きゅう}給^{きゅう}が充^{じゅう}分^{ぶん}であり、困^{こん}苦^くにも餘^{あま}り遭^{さう}遇^{ぐう}しないから自^{おのづか}ら修^{しゅう}養^{やう}、怠^{おこ}り、敢^{かん}爲^ゐの志^し氣^きをも摧^{くだ}くことになるからであらう。

要^{えう}するに、人^{ひと}がここの世^よに生^うま^れては、逆^{ぎやく}境^{きやう}に處^{しよ}するも、順^{じゆん}境^{きやう}に處^{しよ}するも、乃^{ない}至^し田^た舎^か、都^と會^{かい}地^ちであつても、その成^{せい}功^{こう}の如^い何^かは、そ^その^{ひと}の^{ひと}一^{だい}大^{だい}精^{せい}神^{しん}にある、そして生^{しやう}涯^{がい}の大^{たい}局^{きよく}から靜^{しづ}か^かに推^す考^{かう}したならば、青^{せい}年^{ねん}時^じ代^{だい}に順^{じゆん}境^{きやう}に居^ゐるものは、青^{せい}年^{ねん}時^じ代^{だい}に逆^{ぎやく}境^{きやう}に居^ゐるものに比^ひして、その一^{だい}大^{だい}精^{せい}神^{しん}に大^{おほ}い^{おほ}に及^{およ}ばない處^{ところ}がある。一^ど度^ど何^{なに}かの窮^{きゆう}境^{きやう}に處^{しよ}しては、自^し然^{ぜん}兩^{りやう}者^{しや}の力^{ちから}は明^{めい}瞭^{れう}である。將^{しやう}來^{らい}の大^{だい}成^{せい}功^{こう}を期^き待^{たい}するの青^{せい}年^{ねん}は、この明^{めい}々^々の理^りを思^{おも}うて、現^{げん}在^{ざい}の己^{おのれ}が身^みの逆^{ぎやく}境^{きやう}にあるのを喜^{よろこ}ばねばならぬ。否^{いな}、神^{かみ}に感^{かん}謝^{しゃ}せなければなら

艱難汝を玉にす

立志

ぬ。それは大困難に當り、大障礙を排して、茲に始めて大成功があるからである。

十二 火の如き熱心

狩野守信といへば、號を探幽齋と名乗つた有名な畫家である。壯時彼は泉州堺の一國寺に食客となつて居たことがあつた。一年と經ち二年とすぎ、遂に彼は三年の年月を一度も繪筆を執ることもなく空しく此寺に暮してしまつた。始め彼の伎倆を信じ

て居た、この寺の住職も、餘りの彼の無能さにあきれて、頻りに説いては、揮毫を迫るのであつた。さすがの守信もこの和尚の懇望を辭退することが出來ず、直に筆を執らうとしたが、別にかくべき適當な畫題も浮んで來ないのでそのまゝに一日二日とすぎた、三四日すると或晩小僧が和尚の處へやつて來て、守信は氣が違つたと告げた。和尚は驚いて、すぐにその部屋を窺つて見ると、深更だと云ふのに守信は、横になつたり、起つて見たり、腰をかゝめたり、種々の姿勢をして障子に自分の影を

火の如き熱心

立志

寫し、熱心にそれを見入つて居るのであつた。翌日になると守
 信は突然筆をとつて室の杉戸に鶴の姿を描き始めた。かくて十
 數日の間、夜は自分の姿を障子に寫して思を凝し、晝は筆をと
 つて鶴を描き、仕上げまでに殆んど三十日ばかりかゝつて、二
 十五羽の鶴の種々の姿を描き出した。しかもその筆勢の見事な
 ことは、到底凡手の及ぶ所ではなかつた。和尚は大に悦び、或
 日守信を呼んで、その毎夜自分の影を寫して研究した熱心を譽
 めると、守信は大に驚き、直に別室に馳せて行つて。そこにあ

つた杉戸に一本の檜を描いて、そのまま、何處ともなく立ち去
 つてしまつた。和尚は非常に残念に思つて毎日噂をして居ると
 數十日経つて、守信に突然寺に歸つて來た。和尚は大に喜んで
 ぞうしたのであると尋ねると、守信は「自分が此所を去つて東
 國に下つて行く途中、箱根にさしかゝりましたが、あの山中に
 一本の古い檜があつて、その一つの枝が如何にも年來思つて居
 た枝であつたので、先きに書き残して置いた檜の一本の枝を書
 き足しに歸つて來たのです」と云つて、直に例の杉戸に走り行

火の如き熱心

立志

き、筆を振つて一枝を書き添へ、又飄然として何處ともなく立ち去つてしまつたと云ふ。

この話は、如何に昔の名人がその道に熱心で、夢寐にも己が藝道に就てのものを思を忘れたことのないのを示して居る。かう云ふ人は元より人に優れた天稟の才能があつたのであらうが、又その火の如き熱烈の意志あつて、始めて古今に冠絶した名人ともなり得たのである。

かう云ふ話は偉人傑士の間には數限りなくあるが、誠に熱心

は成功の唯一の武器であると言つてよい。熱心の前には如何なる妨害も如何なる障礙も、遂に霧散氷解するものである。その人のあらゆる勢力が、その目的に集注され、ば、それに火の如き大精神が燃える。そして總ての障礙は之がために焼き盡されるのである。かういふ時には、如何なる貧窮でもとよりその人を破ることは出来ない。まして周囲の情實など何の恐るゝ處があらう。そしてその燃えたつた處は、その眞實であり、その人の眞價である。即ちその人の誠心である。誠意である。この

火の如き熱心

立 論

心はやがて人を動し、尙進んでは非情の天地をも感動せしめる程である。

昔支那の雛衛と云ふ人は、燕王に仕へて忠義であつた。然るに或時讒者の爲に退けられ、獄に下された。その時雛衛は己が忠誠の王に通じないのを悲しみ、天を仰いで慟哭した。すると時は夏五月であるのに、天霜を下したと淮南子に書いてある。又王充の論衡の中にある話であるが、昔杞梁といふ人が戦死した時に、その妻が嘆じて「上に父なく、中に夫なく、下に子な

し、成人の苦至れり」と言つて、長哭すると、杞の都城は之に感じて頽れたといふ。

この二つの語は、直にそのままは信じられないが、とにかく人の誠心は、能く炎天に霜を飛ばし、堅い城をも隕すことが出来るほど、力強いものであると云ふ眞理を語つたものである。之にはたしかに高い、しかも動すべからざる眞理がある。吾々は飽までこの火の如き熱烈な誠意を以て、事に當り勵んだならば、成功の域に達せない事はないのである。

火の如き熱心

十三 精力主義たれ

バクタストンといふ人が死ぬ時に言つた「余は長く生きれば
 生きる程よくこの道理が解つて來た。それは人間の高下、強者
 弱者の相違は、疑ひもなくその人の精力の如何であることであ
 る。即ち人が己れの目的が定まつたなら、のるか、そるか、全く
 その精力の働き一つでやつて見るべきである、もしこの力が内
 に充滿して居つたなら、凡そ人間の出來得べき筈のものであり

さへすれば、出來ないことは一つもない。もしこの力が缺けて
 居れば、いくら才能があつても、如何に好機會に遭遇しても、
 人間は人間として成功することは出來ない」と。

誠にさうである、世の多くの所謂成功者を觀るに、皆この精
 力の絶倫な人である、即ち精力主義の人が、必ず最後の勝利を
 得るのである。世の中には智者といふものがあつて、智のみに
 よつて、手取り早く事をなし遂げやうとするにある。それは
 幸にして一氣呵成にやりとげられ、ばよいが、さう甘く行く

ものでない。この場合精力の缺乏したものは、忽ちいや氣がさして、もち耐へて行けなくなり、遂に全く失敗に歸するのである。

今の獨逸皇帝ウイルヘルム二世は、現に世界の攪亂者として幾多の批難を蒙つて居るが、一方彼の活動ぶりを見ると、誠に精力絶倫の人として推賞に價ひするのである。今日世界の強國なる英露佛を相手にして、とにかく大した敗北もなく今日まで經過した處を見ると、彼の即位以來の奮闘的生活が充分に表れ

て居るのである。

前の米國の大統領ルーズヴェルトも亦現代の活動的人物の典型である。彼は幼時極めて虚弱であつたが、長ずるに従つて運動を劇勵した結果、體力强健、精力無比の奮闘的勇士となつた。それから後は彼は一日も運動を廢したことなく、學校の門を出て、社會の公人として匆忙繁劇の間にあつて、一日も倦怠の色がなかつた。曾て紐育の市會議員となり、一方に於て種々の著述に従事した時、少しく健康を損した事があつた、此時彼は

精力主義たれ

立志

斷然ワイオミングといふ田舎にひつこみ、理想的田園生活に入つたが、その間にも、殊に猛獸狩に興味を持ち、熊狩、虎狩、狼狩などあらゆる危険を冒してしかも最も快としたのである、其精力は實に非常なもので、之がやがて前後二回の大統領在任中、稀世の大活動をなし遂げた所以であらう。

要するに、他の條件が等しければ、十の精力あるものは、二十の精力あるものに敵することは出来ない。十は二十に適應するだけの事業をなし遂げるのである。かのナポオンは一日の

中に、三時間の睡眠で充分活動したさうであるし、かのウエリントン將軍は、三晝夜一眠もせず、馬上僅に數片の麵麩を嚙つて、八十里の險道を驅馳したさうである。大丈夫の精力は、とにかく普通ではないのである。

十四 意志を堅くせよ

自助的成者として有名なフランクリンは、實に堅固な意志を有つて居た人であつた。彼は最初まづ十三ヶ條の座右の銘を

意志を堅くせよ

作つて、之が實行につとめ、之を實行することによつて、益々その意志を鞏固にして行つた。座右の銘の第三條には、「己れの爲すべきことは必ず之を爲す、一旦決したる所の者は、必ず之を遂ぐべし」といふのであつた。彼はこの主義を以て、生涯一身を修め、健闘したのであつたが、その意志の鞏固であつたのは彼の一向に欲情を抑ゆるに努力した事實で明である。人は身體が強壯であればあるだけ、その欲情は益々盛になるものである。フランクリンは他の多くの青年に比して、極めて強健な身

體を持つて居た。従つて彼の欲情はその精力に比例して非常に旺盛であつた。その上に何れの青年も等しく蒙るべき諸種の誘惑は彼の身心をも襲つたのである。だが彼の強烈な意志は皆之を卻けて、少しもたゆむことがなかつた。彼の友人の多くは、啤酒を常用して居たが、彼は一人之に換へるに水を以てした、友人は之を嘲りて彼を「水飲の米人」と呼んで居た。又食事の如きも、欲情を抑へる爲めに、麵包を碎いて胡椒に混ぜ、それに少しの牛酪を交へて煮た水粥を用ひて居た。しかもその健康

意志を堅くせよ

は他の美食者に優るとも劣るやうなことはなかつた。かくして欲情の爲めに空費さるべき時間と金銭と精力とを利用して、佛蘭西、西班牙、伊太利、拉典の諸國語に精通した。かくて彼の幸福な生涯は、この強烈な意志の表象であつた。

諸戸清六といふ人は、一代の富限者であつたが、又一方畸人として、有名な人であつたし、彼の生涯も亦、鐵のやうな意志の權化であつた。彼は十八歳の時、家産の頽廢に遇つて、奮然倔起したのである。彼は一生の中に、日本一の大金持となる

いふ覺悟であつた。然しそれは不幸にして達せられずに途中で死んだが、とにかく日本一の山林業者として共に推賞されるに至つた。世間によく知れて居る彼の金銭と時間との節約に關する條項は、極めて興味ある事實である。

時間の節約法

一、熱い飯は食ふに手間取り時間を空費する故、常に冷飯を茶漬にして食ふ。

二、飯の盛代へも亦時間潰しであるから、二個の茶碗を用意

意志を堅くせよ

立 志

して一杯食する間に他の一杯に盛らせる。

三、晝飯は一口に食へるやうな握飯を二三個宛こしらへて置き帳場の用向きの隙間隙間に食べる。

四、下駄草履は三四足宛上り口の各處に置き列べ、何時でも何處からでも下りて出られるやうにする。

五、旅行用の道具は常に一處に纏めて置きすぐにそれをもつて飛出せるやうにしておく。

金品の節約法

一、飯の菜は赤味噌の中へ鰹節と薑どを入れて煮詰め、之を少し宛冷飯の上に乗せて食ふ。

二、遠出の際は小石のある道だけ草鞋を穿き普通の處は跣足で歩く。

三、渡賃を少しでも拂ふは無益であるから寒中の外は衣類をまとめて河を泳ぎ渡る。

四、道に草鞋が落ちて居たら、拾つて来て水で洗ひ、日に干して夜業に之を繕つて穿く。

意志を堅くせよ

その他種々あるが、之等の條項を堅く守つて決して倦まなかつた。之だけでも普通人にはとてもなし能ふ處でない。之は常規を逸して居た厭ひがあつて、直に之を應用は出来ないが、これほど困難なことを實行し得た彼の意志の堅實さは、大に吾々の學ぶところである。

現代のやうな生存競争の劇甚な世に處して、とにかくに一廉の名をなさうとする青年は、普通人のなすことをなして居たのでは、逆も何程の事もなし得ないのである。少くとも「斃而後

已矣」の意志と、「斃れても已まず」の氣概とを持ちたいものである。強烈な意志を持ち、満腔の熱血を濺いで奮闘努力し、而も尙成功の彼岸に達し得ないなれば、それは天なり命なりで、人力の如何ともすることの出来ないものである。しかもかくの如きは決してあり得べからざる事であると思ふ。

十五 時は金なり

「時は金なり」の金言は、昔から時間の尊さを云ひ表した詞で

時は金なり

あるが、現代の世には「時は金よりも尊し」であらねばならぬ諸戸清六のやうに普通人の水平線からやゝづ抜けて居る人へ、時の節約法をあれほどまでにしたのを思へば、吾々は更にこの問題を三思せなければならぬ。しかし「時は金なり」の金言も、時間を利用しない遊惰な人間にとつては、何等の意味もなさないのである。商業上にしても、軍事上外交上にしても、實際に一刻が千金にも換へ難い場合は屢々あることで、それが爲に大損害、大失敗を招くことはあり勝ちである。だから常に

この節約と、利用法とを注意し、その貴さを思はねばならぬ、しかも人事のあらゆることが、この時間に至大の關係を持つて居る事は誰人も知ることである。

或時一人の少年が、とある本屋の前に立つて、しきりに飾窓の中の一冊の本を眺めて居たが、暫くしてその番頭に向ひ、「此本は幾干ですか」と聞いた。番頭は「一圓です」と答へると、少年は「もう少し安くして下さいませんか」と言つた。番頭は「一文もひけません、一圓は元償です」と答へた。少年は

時は金なり

立志

暫らく考へて居たが、やがて又番頭に向つて、「ご主人は御在宅ですか」と尋ねた、番頭は「はい居られますが、唯今非常に御多忙のやうです」といふた。少年は「とにかく是非お目にかゝりたい」と言つた。かくてやがて本屋の主人は出て来て少年に遇つた。少年は丁寧^{ていねい}に會釋^{あしやく}して、「此本は一圓ださうですが、もう少し安くして下さいませんか」と云ふと主人は「その本は一圓五十錢にして置ませう」と答へた。少年は不思議に思つて「一圓五十錢ですつて？ 唯今番頭さんは一圓だと仰つたの

ですが」と反問すると、主人は「それはさうです。併し私にとつては、今之を一圓五十錢に賣るよりも、先程一圓に賣つた方がよかつたのです」と述べた。少年は益々不思議に思つたが、尙安く買はうとして「實際幾何で賣りになるのですか」と聞くと「二圓で賣りませう」と主人は云つた。少年は「それは愈々奇體ですね、唯今一圓五十錢と仰つたではありませんか」と言ふと、主人は「勿論さう云ひました。然し今之を二圓に賣るよりも、先程一圓五十錢に賣つた方が、よかつたのです」と言

時は金なり

ひ切つた。

少年は茲に至つて始めて思ひ當つた。そこで懷中から二圓の金を取り出して、その本を購ひ、心に主人の時間の大切なのを諷して呉れた好意を感謝し乍ら家に歸つたと云ふ話がある。之は亞米利加の話であるが、興味深い事實ではないか。

青年が學に志すに就ても、時間の利用如何は痛切にこの成業の如何に關係する。このことに就て、かの米國で「學問する鍛冶屋」として名高かつたエリフ、パーリツトの話は、大に味

ふべきである。パーリツトは十六歳で父を失つたが、家はもとより貧しく、財産とて何一つなかつたので、彼は或る鍛冶屋の徒弟となつたが、一日に十二時宛働かねばならなかつた。しかし勉強したいといふ念は一刻も抑へることが出来なかつたので、どんな零細な時間でもそれを利用することに勤めた。始め彼は數學を研究したが、例題の如きは仕事をし乍ら頭の中で解くのであつた。又拉典希臘文典を帽子の中に入れて工場へ行き、仕事の際々に之をよんで、一冬の間、拉典語と希臘語とを一通り

立志

解するやうになつた。二十一歳になつて徒弟の年期が満ちたので、彼はある酒屋の二階を借りて住ひ、晝はそこで獨逸語、希臘語、伊太利語、西班牙語などを研究し、夜は以前の工場に通つて僅の賃金を得て生計を支へ勉強を續けて行つた。かくして二年間研究した結果、彼は某中學校の語學教師となつた。然し彼は茲に至つて東洋語研究の大望を起し、その目的の爲に東洋諸國を訪ねたいと思つた。しかし金はなし、機會もなかつたので、豫てラーセスターといふ處の考古學會の附屬圖書館に、東洋に

關する書籍が澤山あるといふことを聞いたので、まづ之によつて勉強しやうと決した。そこで語學教師を辭しラーセスターに行つた。こゝで彼は又も一鍛冶屋に職を求め労働者となり、晝は工場に槌を握り、夜はかの圖書館で東洋語の書籍を耽讀した。五年の間、彼は師もなく友もなく、しかも労働の困苦を舐め、奮闘を續けた、そして漸く語學者としてその名を認められ、年僅に三十で、「學問ある鍛冶屋」と呼ばれた。彼は古今各國の語十八に通じ、歐洲の方言二十二種を學得した一大言語學者とな

時は金なり

つたのである。しかして彼は自分のその成功に就て、いつも「自分
分が語學に熟達し得たのは、自分の天才によるのでなく、單に
零細な時間を節約し、利用したのによるのである」と云つて居
たさうである。

十六 大事は小事より

世の中には英雄を學ぶものは随分多數にある。けれどもそれ
等の人は、とかく英雄の大事業にのみ心を奪はれて、その奥に

横はる細事の心得べきを思はない。「大功は細瑾を顧す」など
云つて、些細な事はうち棄て、置くのである。然しこれは根
本的に間違つて居る考で、眞の英雄は皆極めて細心なもので
普通人の氣のつかぬ小事に眼をつけて居る。この細心の注意は
やがて大膽な行動となり得るので、そこに脱漏があつては、苦
心の雄圖も「所謂千丈の堤も蟻の一穴」で、忽ち水泡に歸して
しまふ。

世に豊臣秀吉の遺訓として傳へられて居るものに、

大事は小事より

立志

- 一、欲を離るべし。
- 二、女に心を許すな。
- 三、人と物を争ふな。
- 四、朝寝すな。
- 五、何事も人並にやれ。
- 六、身の行末を謹むべし。
- 七、何事もつくづく物ひげすな。
- 八、物に退屈するな。

と云ふのがある。さすがは秀吉で、彼の一代の事業を委細に點檢すると、この細心の注意のあつたことは、さこそと肯定されるのである。

今日の青年に、自分はよく事に當つて勤勉であるがそれを認めて呉れるものがないといつて苦情を云ふ者がある。それは何人にも經驗のあることで、如何に細事に勉強し、辛苦してもそれを注意してくれるものがないやうに思ふ。所謂「椽の下力持ち」に終るやうに思はれる。けれども、決してそんな事はな

大事は小事より

立志

いので、いつか必ず表はれるものである。「陰徳あれば陽報あり」と云ふのは眞理である、そして如何につまらぬ職業も、己れが職分となつた以上は、飽までも細心に。最上を盡すやうにせなければならぬ。かくすれば必ずいつか報はれるのである。秀吉が天下を統一したのも、彼が初め信長に仕へて、草履取の卑しい役をも忠實に細心に勤めたからである。大海も素は一滴の水からなり、雲に聳ゆる大山も、元は一掴の土くれから成るのではないか。然らば天下の大業も、僅かなことから始まるのである。

ると云つてよい。要するにこの些事の注意といふことは、現代に成功せんとするものゝ、一時も忽にすべからざるものである。かの米國の富豪アスター氏がその成功の原因を語つて、「予が今日の富は小事を忽にせざりし爲である」と言つて居るが、これは古來からの成功者に共通した眞理で、この眞理は實に萬古不易の眞理であると云つてよい。

十七 黙々として働け

黙々として働け

立志

トルストイの小説に「イザンの馬鹿」といふのがある。
ある所に一人の富者の百姓があつて、三人の兄弟を持つて居た。長男はシモン、次男はタラス、三男はイザンと呼んで馬鹿であつた。始め長男のシモンは國王に仕へて戦争に出かけ、大に立身出世して豪華を極めて居た。次男のタラスは商業に志し之も大に成功して金持となつた。然るに三男のイザンは馬鹿であるので、家に居て毎日毎日野良仕事をのみ稼いでしかも安らかに暮して居た。するとこの近所に一人の大魔王が棲んで居た

がこの兄弟の有様を見て喜ばない。直に部下の小悪魔に云つて三人を墮落させるやうに命じた。三匹の小悪魔は直に分れ分れに兄弟三人の處に行つたが、兄のシモンと、次男のタラスとは忽ちに誘惑され、見る蔭もなく零落してしまつた。處がイザンの處へ行つた小悪魔は、始め酒壺に唾を仕込めイザンの胃を傷めたが、剛情なイザンは、呻ることはあつても我慢して、働くことはやめないで何の効能もなかつた。次には畑を一面に固くして耕すことの出来ないやうにしたが、イザンは相變らず毎

黙々として働け

立志

日毎日満身の力を出して掘り返すので、忽ちに柔かになつてしまつた。小悪魔が壊せば繩をもつて来て結びつけるし、力づくで鍬を抑へれば、イヅンも力づくで奪ひ返すしどうしても協はない。遂にはイヅンの爲に捕へられてひどい目にあひ。又兄と次男とを誘惑した小悪魔もイヅンの小悪魔の處へ加勢に来て、之も捕へられ、三匹共に地の中へ潜つてしまはねばならなかつた。大悪魔は小悪魔の消息をまつて居たが、いつまで経つても便りがないので、捜してみると、三匹の小悪魔の影も形もなく、

只地面に三つの穴痕が残つて居るばかりであつたので、大に憤り、直に自身で手を下すことに決した。その頃兄と次男とは小悪魔が退散したのでそろ／＼元の様になりかゝつて居たので大悪魔は直に、又も兄と次男とを誘惑してしまつた。次にイヅンの處へ行つて、種々に計畫を廻らしてみたが、イヅンの例の何事も黙々として働く剛情と、正直な何事にも反抗しない柔順さ、自己の爲さねばならぬことを一直線にして居るその態度には、何事をしてても手答へがない。さすがの大悪魔も遂には食物にも

黙々として働け

立志

困るやうになり、全く自滅するのやむなきに至つてしまつた。しかもイヴンは富み榮えて、どんな人でも來るものには喜んで之を迎へた。唯イヴンの國で、動かすことの出來ない掟は、この國では手の硬い者は食卓に就て食へることは出來るが、手の柔いものは誰でも、必ず前の人達の残り物で満足して居なくてはならぬことであつた。

以上はその梗概であるが、如何にも興味ある小話ではないだらうか、イヴンは全くの馬鹿で、何の才能もないが、只正直で、

一直線に自分のすべき事をみむきもせず、黙々と働いて居るのである。しかもその最後は才あり、能ある兄達が零落して、彼のみ一人富み榮えたのである。我々はそこに、人生の眞、人間の眞の力があるやうに思はれる。凡そ人がこの世に處しては一から十までいつも成功して行けるものではない。必ず失敗の憂目に遭遇するのである。しかもこの失敗は成功の基でなければならぬ。人はこの失敗を師とし、失敗を踏臺として、成功の捷路を尋ぬるに越した事はない。然してその失敗を踏臺とし師と

黙々として働け

立志

して突進する場合、唯一の武器は只このイヅンのやうた、じつと忍耐して黙々と働くことである。この力はあらゆる困難を征服してしかも盤石の高きに置く秘訣である。

要するに労働に尊い成功の唯一の力である。

十八 貧賤は成功の基

世の文明が進み、生存競争が劇しくなると富の高下も著しくなつて来る。現代は正にこの風潮が益々盛になつて来たので

ある。封建時代にあつては、社會の萬事が只成法の中にあつて、世襲を尊び、因襲を重んじて何の障ることがなかつた。然し現代は只己の力、己の才能で何事もなし得るのである。只實力あるものが、實力なきものを壓迫し、打ち亡ぼして、最後の勝利を占めて行くのである。だから現代に生れたものは、己が身の貧いのも賤いのも、決して憂へることはない。反つて之が成功の基となるのであるから大に喜ばねばならぬのである。昔でさへ孔子は「富貴は猶浮べる雲の如し」と云つて居る位である。

貧賤は成功の基

立志

古來から大業をなし、名を後世に残したものは、多くは貧賤から生れたものである。

英國の大富豪カーネギーが、曾て人に言つたことがある。「世に富豪の子ほど不憫なものはない。彼等は唯僅の荷物を負うてさへその力は之に堪へることが出来ない。のみならず、彼等は金錢に豊であるが爲に、動もすれば誘悪に侵され易く、其結果遂に一生涯を誤ることがある。然るにかの學校にも行くこと出来ない貧困な人の子弟は、かくの如きことは決してない。彼

等は自己の赤手を以て努力奮闘することが容易であるからである」と。誠に至言である。

昔江戸で初夏の頃初鯉を食べるのは奢りの一つとなつて居たが、見榮を張る江戸兒は争つて之を食べたものである。「初鯉伊勢屋の門を通りすぎ」で、貧しい中を千辛萬苦して一代の富を重ねた伊勢屋の主人は、初鯉などは決して食べなかつた、然し二代目の主人になると「二代目の伊勢屋呼こむ初鯉」で、初代の苦勞は忘れ只其奢りをするやうになつた。しかも伊勢屋は、

貧賤は成功の基

「賣家と唐様で書く三代目」で、三代目に至つて家までも賣らねばならぬやうになつた話がある。順境に育ち、貧苦を知らぬ二代目三代目は、奢りに長じ、誘惑に陥つて、遂に家産をも蕩盡してしまつた。

幕末の頃、尊王の國論沸騰して天下は鼎の湧くやうで、幕府の運命も一日と危くなつて行つた時、どにかくその運命を一時支へて居つたのは、かの海舟勝安房その人である。彼は一代の人傑として、世に推賞された人であつたが、その半生は非常

な貧困に苦しんだものである。彼は旗本の小祿の家に生れたので、ごく幼ない時から貧乏であつたが、父の没後は殆んど食ふにさへ困難した。或年の大晦日のことであつたが、明日は元旦だといふのに、それに祝ふ餅さへなかつた。彼はふと思ひ出して夕方から、本所の親戚の家に餅を貰ひに行つた。幸に少しの餅を貰ひ受け、夜になつて歸つて來たが、折から兩國橋にさしかつた。その時彼はふと石に躓いて倒れたが、その拍子に手に下げて居た餅のはいつて居る布呂敷包を落したので、餅はば

貧賤は成功の基

立志

らばらと橋の上はしの上へに落ち散おちちつた。彼は土つちだらけになつた餅もちを、三つ四つ拾ひろつたが、急きふに何なんだか情なさけなくなつて、思おもはず拾ひろつた餅もちを隅すみ田川たがはの中に投なげこみ後あとをも見みずに家うちに歸かへつた。これから彼かれは大おほいに發奮はつふんし、遂つひに天下てんかに大名たいめいをなすに至いたつたのである。

十九 苦學力行

報德教ほうとくけうの祖そであり、立志成功りつせいこうの龜鑑きかんとして今日こんにちまでも萬人ばんにんにその德風とくふうを慕したはれて居ゐる二宮尊徳翁みやそんとくせつは、實じつに苦學力行くがくりよくかうの人ひとであ

つた。翁そうは相州柏村さうしゅうかしわむらのある農家のうかに生うまれたが、家いへは極きよめて貧弱ひんじやくであつた。父親ちちおやに早はやく死しに別わかれた翁そうは、やゝ長ちやうじて年老としおいた一人ひとりの母ははを助たすけて、晝ひるは農のうの仕事しごとに従事じゆうじし、夜よるは繩なはをなひ、草鞋わらじを作つくり、それによつて一家四人いかにん——母ははと自分じぶんと弟二人おとうとふたりとの生計せいけいを立て、居ゐた。然しかし彼かれは將來しやうらい、立派りつぱな人間にんげんにならうといふ志こころざしがあつたので、山やまに入り、野のに走はしり、木きを樵こり、草くさを刈かる間あひだも、常つねに一冊さつの大學だいがくを懷ふところにして、隙ひまある毎ごとに絶たえず讀よみ耽ふりつて居ゐた。かくして數年すうねんを経て彼かれが十六歳さいの時とき、又またも母ははに死しに別わかれたので、

苦學力行

立志

其後は伯父の萬兵衛といふ人の許に厄介になつた。彼はこゝで伯父の爲に、晝間は田畑を耕し、夜は繩をなひ、草鞋を作り、又は種々の勞働に従事し骨身を惜まず働いた。そして夜晩く、家内の寢靜まるのをまつて、一人靜に勉強した。伯父萬兵衛は翁が毎夜毎夜晩くまで書物を讀んで居るのを見て、燈油が減ると云つてやかましく云ふので、翁は家の近くの空地を借りて、之を耕し、その收穫で油を買ひ、撓まず勉強を續けて行つた。この苦心慘澹の結果は遂に天下に名をなすに至り、その實踐躬行

の徳望は、一世の師表とされたのである。しかも終生この勞働主義を通したのである。

現代のやうな世の中に、二宮尊經翁のやうなやり方は或は迂遠で、實際的でないかもしれない。けれども貧乏で苦學しやうとする人は、その位の心持ちがなければ決して成功は出来るものではない。勿論充分な學資を持ち、適當な師に仕へて勉強するにこしたことはないが、その出来ない人は、やはり苦學するより仕方がないのである。現代に名をなした人で、苦學力行

苦學力行

立志

した人は澤山にある。けれどもその人達は餘程普通人に優れた意志の鞏固な人々であつた。支那にも昔、貧乏で油を買ふ錢がなく、夏は螢を集めて灯火に換へ、冬は雪を積んで勉強した人の話があるが、皆普通人のやうなことをしては居なかつた。まして今日の世の中は誘惑が多く、刺激が劇しい。事情は種々ど昔とは變つて居る。だからそれで成功せんとする人は、餘程人並優れた努力と、堅忍不拔の精神とがなければならぬ。それさへあれば、決して出来ないことはないのである。幕府の萩生徂

徂が如き大學者も、盲目の大儒塙保己一の如きも、何れも苦學力行した人であつた。現代學界の名士にもかの維新時代の擾亂の世にあつて、ずるぶん苦力した人は多いのである。

「奮闘生活」の著者として世界に名高い米國の名士マーデンの如きも苦學で成功した人の一人である。彼は千八百五十三年に、米國ニューハンプシャイナ州の一村に生れたが、家は赤貧洗ふが如しといふ有様であつた。母は彼の三歳の時、父は彼の七歳の時、何れもこの世を去つたが、後には自分の外に幼

苦學力行

立志

ない二人の小弟が残つた。彼には祖母が一人あつたが之も敢て有福とふのではないので、彼はある牧師の家庭に雇はれ、僅な賃金を得たり、又は山に入つて木を伐り、野に出でては果實を採り、家に居ては洗濯をするなど、極めて勞苦多い生活をして居た。其後小弟は或人に托し、彼は他の家に雇はれたがこゝで彼は日どなく夜どなく、非常に酷使されたので、屋根部屋の己が寢床で、泣き明した夜も少くなかつた。遂に彼は殆んど堪へることが出来なくて、一日家族が教會へ行つた留守中、この

家を逃げ出し、マド河の沿岸の或町に來た。彼はこの時始めて身體だけは自由になり、種々の勞働に従事して生活して居た。その頃彼が宿を借りて居た家に二人の娘があつた、一人の娘は非常に讀書が好きで、常に熱心に獨學して居た。彼は忽ちこの娘に感化され、己れも勉強しやうと云ふ望を起した。處がもとより別に勉強する餘暇とてもなかつたので、睡眠の時間を節し、休みの時を利用して、その娘の持つて來る僅の書籍を讀破したのであつた。其後ニュー、ロンドン専門學校に入學しやうと決

苦學力行

立志

心し、種々の困難と戦つて、望みを遂げ、遂に専門學校は首席で卒業し、續いてポストン大學に入り、首尾よく名譽の月桂冠を得、世界の青年をして渴仰おく能はざらしめるやうな名士となつたのであつた。

二十 正直の頭に神宿る

世の文明が進むに従つて、人の智識は發達する。智識が發達すると、世に處するにも、どかくこの智識のみにより、勞少く

功多いやうな生活をしたいと望むのである。これは元より當然の要求で決して批難すべきではないが、然し之はやゝもすると只權謀術數を廻らして奇功を期し、頓才機智のみを弄して意外の成功を望むやうになるのである。之は敢て一概に咎むべきでなく、寧ろ時に望み、變に應じては如何にも必要であるが、この心が増長すると、只さう云ふ方法の外はこの世にとるべき手段はないやうに思ふに至るものである。然しそれは大なる誤りで、寧ろこの智惠のみによつて行動するのは、偉人英雄であつ

正直の頭に神宿る

立志

て始めて好果があるもので、普通人はやはり他の堅實な手段を擇ぶべきである。それには昔から成功の要訣として守られて居る、正直の一路である。昔から正直を守つて失敗した人はない。奇智頓才、智慧による人は、時に、非常に好都合で一時成功するかもしれないが、永續きはしないのである。人生の長い行路に於て最後の勝利を占めるのは、やはり正直の人である。正直を守つて他人から怨まれたり、嫌はれたりした人はない。「正直の頭に神宿る」といふが、幸福は必ずこの正直の人の頭に來るのである。

現代のやうな生存競争の劇しい世の中に、正直なごを守るのは、一見愚なことのように思はれるが、眞理は永久に眞理で、昔も今も變りはないのである。米の飯と正直とは、人として一日も缺くことの出来ないものであることは、昔も今も同じである。現今の三越呉服店は各商店の中で、その最も盛なもの、一つであるが、その創設者の越後屋八郎右衛門があつた。彼は當時一般の商人が、商品を賣るに掛直をするのを當然のことのやうに

正直の頭に神宿る

立志

思つて、二三割の掛直は必ずするのを見て、この弊風を改めた
 と思つた。尤も當時は、今日のやうに現金で品物を賣買する
 のでなく、皆かけ賣りと云つて、代金は月末乃至年二期に受取
 つたので、自然掛直をせずには居られなかつたのであらう。八
 郎右衛門の主義は、正直といふことにあつたので、この弊風を
 打破しやうと決心し、そこで現金安賣の制を定めた。即ち總て
 の商品には悉く正札を付け、全く掛直をせず、正直を旨とし
 て賣り出したのである、しかも之が評判となり、追々店も繁昌

し、遂に今日の三越の基礎を堅めたのである。これは八郎右衛
 門の正直が、時代の弊風を打破し、寧ろ時代に投じ、その結果
 成功したのである。

米國のアブラハム、リンコーンは、正直の人として一代に尊
 崇された。彼は若い時分ニューサレムの一商店に店員として働
 いて居つた。恰度彼が二十二歳の時、或日家から二哩も距つた
 處の、チューカンと云ふ夫人の店から四圓六十錢の金圓を受取
 つて歸つて來た。所が夜になつて受取つて來た金を勘定して見

正直の頭に神宿る

ると、理由なしに六錢多く受取つて居るのである。リンコーンは驚いて、直に返さなくてはならぬと思ひ、疲勞を厭はず、僅に六錢の金を以て、ヂューカン夫人の許へやつて來た。夫人は將に床につかうとして居た時であつたので、今頃誰だらうと戸を開けて見ると、晝間の商人リンカーンであつた。そして彼から事の始末を聞きとつて、夫人は彼の正直なのに感じ入り大に賞讃したと云ふことである。

リンコーンのこの若い時代の正直の心は生涯變らなかつた。

彼はその後學に志し、大に勉強した結果、遂に立派な辯護士となつた。しかも所謂辯護士氣質は、彼の正直な心には、どうしても相合はず一人超然として居たのである。或日の事であつたが、一人の知らぬ人がやつて來て、或る事件を依頼した。彼はその人から事件の委細を聞きとつて、徐ろにその人に云つた。「私はこの事件は御引受することは出来ません。といふのは、實際この事件は貴方の方が悪いので、先方が正しいのです。」するとその人は、「それは貴方に關係のないことではありませんか。

立志

貴方は辯護士で、私が相當の報酬を差上げる以上、貴方は辯護すべきではありませんか」と云つた。之を聞いたリンコーンは聲を勵まして、「さうです私は辯護するのが職業です。ですが私の職業は悪いことを辯護するものではありません。いくら報酬を頂いても、悪いと極つてゐる事件をお引受することは出来ません。私の職業がそれを許しません」と言つた。するとその人は非常に困つたやうな顔付で、「併しそこを巧く貴方が辯護して、此事件に勝つやうには出来ないものでせうか」と聞いた。リン

コーンは平然として「それは貴方を勝たさうとすれば、譯なく勝てる事です。然し私は斷じて致しません」と答へた。その人は更に「いくら報酬を差上げてでもですか」と聞くと、「さうです貴方の財産を皆頂戴しても、いやです。貴方もよくお考へ下さい。例へ法律上正當であつても、それが道徳上必ずしも正しいとは云へません。私はこの事件はお斷りいたします」と答へた。リンコーンの生涯はかう云ふ風であつた。そして反つて之が萬人の尊敬を集めて、後世までもその名を慕はれて居る。誠に

正直の頭に神宿る

正直は百萬の味方にも優つて力強いものである。

二十一 節儉の美德

水戸黄門光圀卿は、名君の譽の高かつた人であつた。その平常の行状は、さすがに世の龜鑑として恥しいものは一つもないのである。中にも常に節儉の美德を讃へられ、之を自身に堅く守られ、近侍の者にも力説されたのは、著しいことであつた、例へば一片の紙片と雖も、極めて大切に保存され、他所から來

た手紙などは、その兩端の白い部分を切り取り、それをつぎ合せて書物をするに用ひられ、又反古は侍女に命じて紙燃にせられた程である。

或年の嚴冬の事であつた。卿は老女の某を召され、「予は先日紙を製する業を見たが、極めて面白き故、今日は汝等を伴ひ、紙渡場を見せ遣すべし」と仰せられた。老女は畏つて之を侍女達に傳へると、常から餘り外出の出来ない侍女達は非常に悦んで、松草村の製紙場にお伴した。行つて見るとそこに觀覽場

立志

が設けられてあつたが、川原に粗末な板を以て棧敷をかけ、戸障子の備もなく、肌きるやうな川風はしきりに吹いて來るのである。侍女等は案に相違して面白いどころか、寒さに堪へ兼ねて居たが、光圀卿は紙漉く人の赤脚のまゝで水に入り、或は兩の手を紙汁の中に浸して居る様を指して、「如何に紙を製するこの困難なを知つたか」と仰せられた。侍女等は今更のやうに、日頃卿が仰せられた教訓の眞理であるのに感じ入つたと云ふことである。

節儉の美德

卿のやうな何不足ない名門に生れた人でさへ、節儉の美德を稱へられ、このやうに行はれたのである。世人の多くの人は目前一時の計算は巧であるが、將來永い間の計算には疎いし、又零細なことに就ては極めて無頓着である。毎日一錢宛貯蓄しても一年には三圓六十五錢となり、十年には三十六圓五十錢となる。誠に解り易い道理であるが、之を實際に行ふ人は少ないのである。古人も「塵積れば山となる」と云つて居るし、「一圓を儲んとするよりも、一錢を浪費せざれ」と云つて居る。今日の

立志

富豪巨商と呼ばれて居る人は中には一攫千金の大儲をした人もあるが、多くはこの節儉によつて、微を積み、細を残して拵へ上げたものである。

然し節儉といふことは、一步誤れば吝嗇に陥り易いものである。とかく少し金が貯つて來ると、そこに面白味が出て來て、何でもかでも貯めやうとするやうになる。如何なる卑劣な手段でも、どんな無情な行爲でも、その目的の前には厭はなくなる。さうなつては誠に情けない話である。元來金を貯めるのは、あ

る目的の爲の手段で、例へば金を貯めて、一身一家の安全を謀るとか、天下國家の爲に有時の際に盡すとかである。然るにその手段を忘れて貯めることを目的とするやうになつては、所謂守錢奴で、何の爲にもなるものでない。「君子は財を惜む、之を用ふるに道あればなり」で、有用な場合には使つてこそ、眞に節儉の主旨にも協つて居るのである。だからこの節儉と吝嗇との區別を正確に心得べきである。

殊に現代の様な物質萬能の時代にあつては、金錢の要は千百

立志

にして留まらないのである。のみならず人として獨立の精神を貫徹しやうとするには、まづ衣食住の三つを安全にせなければならぬ。衣食住の安全は金錢によつて遂げられるのである。古人も「衣食足つて禮節を知る」とか、「恒産なきものは恒心なし」とか云つて、衣食の安全でないものは、とかく主義も禮節もち得ないと言つて居る。我國にはとかく東洋派、武士道流の豪傑氣質があつて、「武士は食はねど高揚子」などと云つて居るが、事實は決してさういふものではない。要は眞に金錢の尊さを知

り、無い金錢をしいて儲けやうとする考よりも、第一にある金錢を浪費しないやうに心掛けべきである。かう言つたからとて一にも金、二にも金と、黄金萬能になつても困るが、とにかく眞の意味の節儉を守ることがは世に奮闘せんとする青年の常に思ふべき處である。

二十二 機を見るに敏なれ

紀國屋文左衛門の話は誰も知つて居る處であるが、彼は始め

機を見るに敏なれ

紀伊國の商人であつた。或年の秋のことであつたが、紀伊國では蜜柑が漸く豊つて、一刻も早く江戸へ送らねばならぬ時期となつた。處が折あしく海上が荒れて、如何にしても船を出すことが出来ないで、空しく腐るのを待たねばならなかつた。之を見た文左衛門は、機こそ來れど、直に大決心をなし、殆んど無價のやうに多數の蜜柑を買ひ入れ、一艘の船に積みこんで海上遙に乗り出した。海上の困難は非常なものであつたが、死を期して居た文左衛門は、舟子を督勵し、その嵐を乗りきつて、無

事に江戸へ到着した、さすがの江戸兒も彼の大胆な行動に驚き、且は思ひがけない蜜柑の入荷に大に喜び争つて買ひ入れた。文左衛門はこれが爲に莫大な富を得たのである。「沖の暗いのに白帆が見ゆる、あれは紀の國蜜柑船」と唱はれたのはこの話である。

文左衛門はその後に江戸に移り住み、材木屋を始めた。或年江戸には、かの有名な明暦の大火が起つた。時は明暦三年丙午年で、さしものに繁華を競つた市中も、殆んど焼き盡されてしま

機を見るに敏なれ

つた。大火が起るや人々はどうしてよいか分らず、只呆れて逃げまどうのみであつた。機を見るに敏なる文左衛門は、この大火が終れば、直に普請の爲に多くの材木が必要であると察し、自分の家の焼けるのを後にして、早駕籠を飛ばし、木曾を始め上總下總伊豆常陸邊の材木を一手に買ひ占めてしまつた。火事が収まると、果して材木の需用が起つたが、大抵の材木屋は家と共に品物を焼いてしまつたので少しもないのである。處か紀伊國屋にはあるといふので、市人は何れも皆紀伊國屋に注文する。

文左衛門は直に先を買ひ占めた材木をどん／＼とり寄せて、供給したので、僅の間に數百萬兩の巨利を占めたさうである。晩年の文左衛門は、餘り豪華な生活を送つた爲、その終りを全くしなかつたが、その機を見るに敏であつたのは大に見るべきものがある。社會の組織が完全になるに従つて、世の中にはかう云ふ機會は少くなるけれども、何業に拘はらず機に乗すべき眞理は、昔も今も變るものではない。現今の富豪達のやうな明治初年時代の一大機會は今日にはないにしても、小なる機會

機を見るに敏なれ

はいくらでもある。只これを一時も早く見抜くといふことが、勝利を得るの秘訣である。だから大に世の形勢に達観し、それを観、之を察して直に事に従つたなら、成功しないといふことはない。けれどもこの機會は逸し安く、又一度逸した機會は再び捕へるのは中々困難である。羅馬の古諺にも「機會はその前額には毛髪あるも、後髪は禿げて居る怪物である。故に前髪を握れば之を留むることを得るも、一度之を逸せばヂュピターの力も之を捕へる事困難である」と言つて居るが、實際後から追

かけて居ては、中々捕へるものではない。商界に手足を伸べやうとする青年は、殊にこの機を見るに敏ならん事を望むのである。

二十三 界斷よく大業を成す

物事は如何なる場合に處し、如何なる事情に遭遇しても、行くべき路、取るべき手段は右か左か一つより外はないのである。右が利益か、左が好都合か、その場合に處しては、大に考慮す

果斷よく大業を成す

べき必要はあるが、結局はその一つを擇ばねばならぬ。而してその二途何れかに決し難いのは、何れが利か何れが損か明でない場合であらう。かういふ場合に處して、最も必要なのは、即ちこの決断である。何事に處しても、萬事この決断によつてきばきと事を決し處理して行けば、或は時に不利益な事も利益となる場合がある。右せんか左せんか、まづ明日まで待つて見やうと、とかく形勢を觀望し、狐疑逡巡するのは大丈夫の探るべき態度でない。「明日ありと思ふ心の仇ざくら、夜半に嵐の

吹かぬものかは」で、今日爛熳と咲き亂れて居る花も、夜半に嵐が吹いて來れば、一夜にして散つてしまふのである。「思ひ立つたが吉日」で、その日に、この時に何事も決行してしまはねばならぬ。即ち今を機會としてなさねばならぬのである。かの蓋世の英雄シーザーも、彼に寄せられた書簡を受取つて、直に開封せなかつたばかりで、遂に元老院で暗殺者の手に斃されたのである。その手紙は彼に、その日の隱謀を密告したものである。一刻の猶豫があつた爲に、一身をも失つたのである。

果斷よく大業を成す

立志

豊臣秀吉に就ても、彼の果斷が大に功を奏した話がある。彼が或時京都の北野で諸大名と共に茶の湯の會を催して居つたが突如一卒が「佐久間反旗を擧げたり」と報じて來た。之を聞いた秀吉は、一寸考へたが少しも騒がず、直にその席から尻を端折り、佐久間の居城をさして驅け出した。近侍の者を始め諸大名も、一時は大に吃驚したが、直に用意を調べて秀吉の後を追つたのであつた。その爲に程なく軍勢も調ひ、反つて叛軍が狼狽して、容易に佐久間氏を平げることが出來たさうである。之

等は極めて不用意の話のやうであるが、急の場合に處して最も機に應じたものであつたのである。

現今の三井銀行が創業の當時、かなり重い役を勤めた人に中上川彦次郎と云ふ人があつた。氏は銀行の爲には随分力を盡して功績のあつた人であつたが、その事務を處理することの敏速なのは、實に疾風の枯葉を吹き拂ふやうであつた。どんな重大な事件でも、彼の前には決して停滯することなく、悉く一言で裁決を下すのであつた。しかも、彼が死んだ後で、愈々その

果斷よく大業を成す

才能の平凡でなかつたのが證據立てられた。或日彼は例のやうに銀行に出勤して居たが、急に気分が悪くなつたので、直に歸宅して床についた。が、夕方になつて、何の苦もなくそのまゝ逝つてしまつた。餘り唐突の死に家内の者を始め何人も豫期して居なかつたので、大に驚いたのであつた。然も彼は重大なる責任者の地位に居て、一身で萬務に當つて居たので、定めし未済の案件も未済の事務も多いことであらうと、銀行でも家庭でも、彼の机の抽斗しを調べて見ると、机の中は驚く程奇麗に處

理してあつて、一通の書狀すら未済のまゝで残つて居るものはなかつたのである。多くの人は今更乍ら氏の即決主義が思ひ出されて、大に敬服したと云ふことである。

二十四 十年一日の勤勉

當代の青年は極めて功名心が旺盛であつて、それがためにとかく、あせる事が多い。功名心の盛なのは、誠に結構なことであるが、動もすれば空想の虜となり、大臣宰相を夢み、百萬の

立志

富豪、大實業家を眞似るのである。けれども彼等は、只大臣宰相、富豪大實業家の半面のみを見て之を眞似、空想に耽り、眞にその中に横はる過去の彼等の苦心慘澹を思はないのである。大臣宰相、富豪大實業家がそれだけの地位に達したのは、幾多の苦しい事を耐へ忍び、然して努力奮勵した結果であるのである。現代の青年はこの労苦を思はずして、只成功した表面の美しいのを見て、空想を逞しくし只一足飛びにならうとあせるものが多い。殊に今日のやうな文化の發達した時代には、昔より

も尙數倍の労苦が必要であるのに、とかく十年一日の勤勉者が少いのである。それでどうして偉大な成功が得られやうか。かの徳川幕府が三百年の泰平を有つたのも、家康の忍耐の徳が礎となつたと云つてよいのである。有名な話であるが、信長と秀吉と家康との性格を評して、信長は「鳴かずんば殺してしまへ時鳥」で、秀吉は「鳴かずんば鳴かして見せう時鳥」であるのに、家康は「鳴かずんば鳴くまで待たう時鳥」であつたと云ふが、只一匹の時鳥を鳴かすか鳴かさぬかに就ても、これだ

十年一日の勤勉

立志

けの相違があつたのである。徳川氏十五代の泰平は、全く家康の「鳴くまで待たう」と云ふ處に胚胎して居たのである。現代青年もこの家康の忍耐を持つて居たなら、成功は決してむづかしくない。社會の秩序の調つた今日、どうしても漸進主義で一步一步、堅く足を地にふみしめて頂上に達するやうに心懸けねばならぬ。

この理を寓した卜話に面白いものが一つある。或時義經と辨慶とが、押糊の競争を始めた。處が辨慶は己が豪膽な性質から

一升の飯を一氣に押し潰してしまはうとして、彼の得意の鐵棒で力を極めて突き始めた。然し餘り力を入れるので、飯粒は滑つたりとんだりして、幾回ついても糊にならないのである。一方義經の方は、小さい竹筥で一粒一粒宛心靜かに押し潰すのでまたくまに一升の飯を押し潰してしまつた。結局辨慶は只後鉢巻で汗を流し、鐵棒を振つたにとゞまつて、遂に糊にならず、義經の前に兜を脱いだと云ふ事である。

もう一つ列子と云ふ本にかう云ふ話がある。昔愚公と名乗つ

十年一日の勤勉

立志

た者があつたが、彼は自分の家の前に大きな山があつて、さか
 く眼障りになつていけないといふので、之を他所に移さうとし
 た。そこで翌日から毎日毎日、子供等をひき連れて、手づから
 鋤鋤をとり、一簣宛擔つては餘所に運んで居た。或日のこと智
 臬と云ふ人がやつて来て、愚公のこの様を見て笑つて言ふやう
 には、「かやうに大きな山を、僅な人力でどうして他に移すこと
 が出来やう。餘り馬鹿々々しいではないか」と云つた。愚公は
 之を聞いて「それは、私の一代のではとても移し終せないかも

しれません。けれども吾が代から毀ち始め、吾が子、吾が孫と
 十代二十代はては百代千代の子々孫々にまで毀ち續けたなら、
 遂に他へ移せぬこともありすまい。」と云つた。智臬は之を聞
 いて益々笑つたこの事である。

今の世の中には愚公のなすことを笑ふものが多い。然しさう
 云ふ人は、愚公の眞の心持を知らぬ人である。現代の人々は智
 臬の智を知ることには元より必要であるが、愚公の愚を學ぶこと
 は尙一層必要である。「怠らず行かば千里の先も見ん、牛の歩み

立志

のよし遅くとも」で、勤勉は最後の勝利者である。

二十五 機智を用ひよ

谷文晁と云へば、文化文政年代の有名な南宗畫の泰斗である彼の描いた畫は今日に於ても、一幅の價數百圓を下らない程である。こんな大家であつたが、若い時分、彼は立派な腕を持ち乍ら、世に認められないので非常に残念に思つて居つた。或年の暮のことであつたが、當時は非常に貧乏で、正月も間もない

といふに餅をつく用意さへなく、且は追々米を買ふ金さへないやうな窮境に陥つた。そこで彼はどうかして己れの技倆を世に知らしてやりたいと思案し、ふと一策を案じ出した。そこで彼は家にありたけの衣類道具を賣拂ひ、その金で澤山の扇子を買ひこんで來た。そして一晩かゝつてその扇子に、富士とか、蓬萊とか、日の出に鶴とか云ふ目出度い繪ばかりを描いて、正月の來るのを待つて居た。百八の鐘の音と共に明け放れた元日の朝早く、彼はかの扇子を背負つて家を出で、有福な書畫でも好

機智を用ひよ

立志

みさうな家と見ると、直に年頭の禮に來たやうな風をして門を
 入り玄關前などへ何心なく例の扇子を一本宛落して來た。かく
 して數百本の扇子を江戸市中全體に皆配つてしまつた。後で扇
 子を拾つた家では、何心なくそれを開いて見ると、目出度い繪
 が書いてあるので縁起がよいと喜び、且誰か年始に來たものが
 落したのだらう位に思つて居た。處が彼方でも此方でも同じや
 うな話があるので、忽ち文晁といふ畫家は、近頃流行の畫家で
 あると云ふやうな評判が、江戸中にはつと立つた。文晁は計畫

圖に當つたので、早速又も苦しい中から金を調達し、寒冷紗を澤
 山に買ひこみ、それを枠に張つて二階の部屋に一杯立てかけて
 置いた。その中には下圖をとつたのや半分書きさしたものなど
 を交せて置いて、一見如何にも依頼人が多く、筆をつけかけた
 が中々書き終せないで居るやうな風にしておいた。果して十日
 も經つとぼつ／＼絹地をもつて、揮毫を頼みに來るものがあつ
 た。來るものは文晁を名人だと思つて居るので、内々遠慮して
 丁寧に頼むのである。すると文晁は泰然と構へて、「御覽の通り

機智を用ひよ

御注文が多いけれどもお急ぎでなくば」と云つて引受ける。客が更に報酬の額を聞くと文晁は迷惑さうに「それは書生にでも御聞き下さい」と云ふので客は書生に聞くと、書生は兼て文晁から教はつた通り、「先生は近頃御多忙ですから餘り揮毫はなさりません、然し二十兩位でよろしくば」などと云つて客を返すのであつた。かやうにして評判はそれからそれと傳はり、書いた繪も中々美事なので益々評判よく依頼者は續々と來り之が世に名を知られる基^{もと}なつて遂に我國有數の畫家となつたといふ

この話は少しく衒氣の多い、人を欺くやうな嫌ひがあるやうに思へるが、一方から考へると、大に興味ある事實である。元來自家の學識才能を世に示し、世を指導するのは當然の事であつて、寧ろ必然の義務である。尤も殊々しく吹聴するのはよろしくないが、充分自分に自信あつて、世に認められぬ時は、文晁のやうな方法も大に興味あること、思ふ。けれどもこれは只單に奇抜な真似をして、世を驚かし人を欺くのでは何の益なく却つて害があるのである。だからかう云ふ機智は天稟の才ある

立志

もので始めて成功するので、それだけの技倆のないものは、やはり他の堅實な方法によるべきである。然し少くとも、社會の趨勢を見、自家の手腕を察したなら、この機智を用ひて時流に投じるのも、成功者の常にとるべき一手段である。

二十六 私徳を慎め

上に述べ来たところは、我々青年が今日、この世の中で志を立て、成功の域に達せんとするに必要な積極的の諸條件

である。然し更に一步退いて考へて見ると、この生存競争の劇しい社會に處し、劇烈な奮闘を持續しやうとするには、更に一身の人格に想到せなければならぬ。少くとも道德上己の衷心に疚い處のないやうな完全の人格を備ふべきである。然して人格の人とならうとするには、第一に己れの利徳を慎まねばならぬ。己れの道德的方面に一點のやましい處のないものが始めて社會的に活動する資格のある者と云つてよいのである。だから飽くまでも己れの一身を修めねばならぬ。現代の社會を見るに

私徳を慎め

立志

一般の人士は只物質的方面の開拓に急であつて、ともすれば道徳的方面に冷淡である。事業をなすものは總ての方面に精力主義でなければならぬと云つて、とんだ穿違ひをして、卑しい快樂に耽溺するのを少しも恥と思はないのである。かくては吾々は祖先から受けついだ尊い誇りを失うて終ふやうなもので遺憾な事である。要するに私徳は人間の根本道徳であるから、何人もまづ第一に之を以て身を修め、更に社會の活方面に活動するやうにしたいのである。かの慶應義塾の創設者たる福澤諭吉翁

がこの事について説き示された教訓は大に傾聴すべき價値がある。氏は實學主義の人であつたが、一方私徳の方面に就ても力説されたのは何人も知る處である。左に要點を拔萃しやう。

第一、社會公德の根本は居家の私徳に在り、私徳の根本は一夫一婦敬愛の情に發達するものなりとの大義を忘れずして、自ら之を實際に施行し、若し此義に背くものあるときは、朋友相戒め、親戚相責め、夫婦相競うて正に歸せしむるを勉む可し。

私徳を慎め

立志

第二、他を責め、他と争ふ者は、己れまづ自から堅固無垢の地位に居らざるべからず、如何となれば徳教は耳より入らずして目より入るものなればなり。既に此地位に居るときは、特に言論を煩はさずして、人を感動せしむることある可じ、如何となれば徳言喋々の辯は德行黙々の力に如かざればなり。

第三、私徳不謹慎の罪は、詐偽破廉耻に比すれば、趣を殊にし、國法の向はざる所なれども、國風を維持するの一點に至りては、其罪孰れか輕重を分つ可からず。此邊より觀察を下

す時は、私徳不取締の罪は、國の榮譽に訴へても許す可からず、即ち不品行者は愛國心なき者として之を責むべし。

第四、私徳修らざるの罪は、一度之を犯して生涯の瑕瑾たる可し、其の過を改めるは改めざる者に比して、遙に好しと雖も、一點の汚痕は畢生これを洗ふて除く可からず。故に血氣の壯者に向つては、特に之を戒めざる可からず。少壯にして罪を犯し乍ら、老氣力の衰ふるに至りて、漸く私徳を論ずるも、その効力左まで大ならざるが故に、その未だ罪に至らざるに

私徳を慎め

立志

及んで、早く之を救ふは最も肝要の事なる可し。

第五、私徳を破りし罪は、その既往と雖も問ふべしとある故に既に之を犯したるものに在りては、今日之を如何にす可きや、と云ふに、其過の改む可きものは速に之を改めて自新の實効を致さしむ可し。若し或は様々の事情に由て然るを得ざる者は、口を閉て道徳の談を談す可らず、誰謹んで自らを守り、社會に對して遠慮する所あらしむ可し。或は身の分を知らずして、差出がましく頭角を現はさんとする者あらば、其

頭を抑へて擯斥すべきのみ。

第六、我國の徳風衰へたりと云ふも、社會の裏面には潔清の男女甚だ少なからず、此種の人の中には、或は智力乏しく、又は金力不足するが爲めに、恰も陰處に蟄居する者あるが故に常に心を用ひて之を開發し、事情の許す限りは、之に勢力を附與して徳友となし、共に我徳城を守り、又共に魔群を攻るの覺悟なかる可らず。

第七、我輩は宗教に淡泊なる者にして、各宗旨の孰れが正、孰

私徳を慎め

立志

れが邪を論ずるを好まず、人々の信する所に任したしと雖も、方今我國に存在する神儒佛耶蘇の中（神儒は宗旨に非ざるも教として）にて私徳を重じ潔清の主義を奨励する點は、大に賛成せざるを得ず。未來々生の事は姑く擱き、現在の今の人間社會に於て百徳の本たる居家の私徳を重じて之を勤むる點に就てのみは、天下の徳友と共に、口を放つて、その美を稱讃せざるを得ざるなり。

二十七 完全なる健康

吾人は最後に衛生論を掲げて本書の結尾としよう。

吾々が所謂道徳と云ふのは、人間の精神の理想状態である。同じやうに健康と云へば又た肉體の理想的状態である。然し吾々の間には、道徳の眞に完全な者が無いと等しく、眞に完全な健康をもつて居る人は極めて稀である。然し完全といふにも二種の意味があつて、一は絶対的の完全、他は相對的の完全であ

完全なる健康

立志

る。絶對的完成の境から見ると、どんな聖人君子でも多少の欠點を見出すのであるが、相對的完全の標準から見れば、共に道德完備の人はないとは云へないし、それと同じく、肉體の健康が絶對的に完全なものはないが、ある意味で完全な健康を以て居ないものはなく、又持てない事はない譯である。

「健全なる精神は、健全なる身體に宿る」とは古くからの格言である。誠にこの格言のやうに健康と精神との間には密接の關係があつて、完全な健康の人には比較的完全な精神が附隨し、

精神の虚弱なものには、健康も從つて怪しいのは實際吾々の常に感ずる處である。まづこの問題に就て考へて見やう。

吾々は道德と云へば、大變窮屈のやうに感じ、往々その實行を厭ふ場合がないと云へないのである。而して健康と云へば誰人も之を聞くの喜び、又健康そのものは最も愉快で、人生の至福であることを知つて居る。さうであるのにどかく世の中には健康な人が少く、又生涯健康を完全に保つ時の少ないのはどう云ふ譯であらうか。思ふに吾々は健康を喜び健康を願ふも、そ

完全なる健康

立志

の健康を得有しその健康を保つ手段方法を盡さないか、又はその手段方法を誤つて却つて健康を傷ふ者が多いからであらう。然して吾々の道徳は概してこの身體の健康を保護するものであるのに之を厭ひ之を避くる者があるのは奇怪である。例へば身體を清潔にすることは衛生の原則であるのに、身體を清潔にするには物事をなすに順序を重んじ規律を正しくするの慣習が必要であるのである。又節制の徳は物事に中庸なのを主として居るが之は又健康の上にも必要な條件である。又、肉體上の快樂

は之を適度に満足せしめれば肉體の機能を全うして健康を支持し生命を延す所以であるから之を適度に満足せしめるものは必要である。けれども此の快樂には誰も耽り易くて、節制することが困難である。しかもこれは中庸の徳によつて守られべきものである。尚飲酒邪淫の不徳は節制を欠くの結果であつて、健康を害することは少くない。凡そ快樂といひ苦痛といふも事物の本質の違ひでなく、概して之を用ゆる度合の如何によるものである。同一の食物でも飲料でも、適度に用ふれば快樂となり、醫藥と

完全なる健康

立志

もなるのであるが、之を過度に用ふれば苦痛となり害毒となるのである。故に快樂そのものも亦た同様に之を適度に満足させれば健康を保ち生命を益するが、之を過度に満足させれば健康を害ひ、生命を害するのである。要するに健康を希ふて健康を得るもの、少いのは、道徳を厭ひ道徳を行はないからである。中庸の道徳を行へば、必ず以上の弊害は根絶されるのである。しかも以上の衛生の規則を遵奉することは、意志の強固ならんことを要するのである。

第十五世紀の頃伊太利ヴェニスヴェニスの貴族コルナロといふ人は生來蒲柳の質であつた上に、飲食及びその他嗜欲を恣にした結果、年四十の時最早命も長かるまいと思ふ程の容體となつた。處が彼は大に悟る處があつて、それから斷乎として衛生の規則を守り、特に飲食を節制し、遂に殆んど百歳に近い長命を保つたさうである。だから道徳と衛生とはごんな年齢の人でも遅いと云ふことはない。殊に青年時代にその實行を見たなら眞に生涯の幸福となることだらうと思ふ。然し實際世に處する上では

完全なる健康

立志

何事も萬事衛生法を以て律せられべきでないし、又餘りに末節細目に拘泥しては、とても思ふやうな活動は出来ないものである。コルナロの如きは飲食するに當つて、一々食物飲料の分量を計るのを例としたと云ふし、又、かの有名な哲學者カントの如きは衛生を重じ、肺臓を傷めないやうにと思つて、往來では一切口を塞ぎ、呼吸をするには鼻孔からする規則を定め、此の規則を守る爲に、他人との談話を避け、單獨の歩行を勵行したといふのである。然し之等は餘りに細目に拘泥し過ぎたので、吾々

今實際にはとても實行し難いものである。だから人は大體に於て衛生の規則を守るべきは勿論であるが、人生重大の事に當つては、その規則に拘らず、事務を行ひ、本分を全うするやうにし、又或る場合には衛生上例外の事を爲しても、猶生命に危険のない程に修養すべきである。

更に翻つて衛生上吾々が健康を保つに必要な諸條件を數へて見るに、第一は道德、第二は運動、第三は滋養、第四は休息、第五は薬用である。この五つの條目は必ずまづ身に行はなければ

完全なる健康

ばならぬものである。然るに世にはこの順序を轉倒し、まづ第一に薬用を主とし休息滋養、運動を後にし、殊に道徳を度外視するものが多いのは誠に心得違ひと云はなければならぬ。

道徳と健康との關係は已に云つたが、薬用に就て大に世に誤つた考をして居るものが多い。それは如何なる理由にも限らず、一にも薬、二にも薬と薬にのみ信賴する人がある。元より病氣の時に薬に依賴するは當然であるけれども、總て薬に依賴するは誤つて居るのである。これに就てかのルーソーの薬用に

關する説は大に思ふべき點がある。

「醫藥は疾病を豫防すること少く、却つて疾病の恐怖心を喚起すること多く、更に死を避けしむるよりも寧ろ生前に死の苦味を嘗めしめ、生命を延長せしめずして却つて之を消耗し、假令生命を延長する場合にも猶人類の爲めに弊害となるものなり。何となれば、醫藥に心を煩はす爲めに、吾人をして社會より遠ざかり、又死の恐怖心を喚起するよりして吾人の義務より離れしむるを以てなり」

完全なる健康